

悪をぶっとばす青年探偵×2

ルシエド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

左翔太郎。

玖珂光太郎。

『相棒』を失ったばかりの二人の探偵が、風都で出会う。

運命の交差の始まりは、記憶を失った須藤雪絵が、事務所ドアを叩いたその時。

仮面ライダーW RETURN VS 仮面ライダージョーカー、開幕。

目次

Kの者達／きのうをさがして	1
Kの者達／仮面ライダー	17
Kの者達／絆の相棒	53
Kの者達／この街に正義の花束を	89

Kの者達／きのうをさがして

腑抜けちまつてる自覚はあった。

昔の俺が、二人で一人つて事実に甘えてたつて痛感してた。

だけど分かつてても、どうしようもなかったんだ。

俺の心に吹く隙間風。

その風よりもずっと可憐で悲しい一つの風は、女の姿をして俺の下にやって来たんだ

……

左翔太郎は事務所で一人、帽子を顔に被せながら天井を見上げていた。

「……………仕事ねえなあ、オイ」

所長は愛しのダーリンとデート。

事件を持って来る警察の人間も居ない。

依頼人もゼロで、閑古鳥すら寄り付かない始末だ。

幸い少し前に仕事のラツシュがあつたおかげか、事務所は金に困つては居ないが、こ
うも暇だと彼は探偵としての自分の存在意義を疑つてしまふ。

翔太郎は時計を見て、反射的に何も考えずに言葉を発する。

「つと、そうだフィリップ。そろそろ若菜姫のラジオが始まる時間……あ」

そして意識していないとつい呼びかけてしまふ”相棒”の喪失を再認識し、自爆に近
い形で、一人で勝手に気分を落ち込ませていた。

「バカか俺は。フィリップもヒーリングプリンセスも、もうないじゃねえかよ……」

左翔太郎には、半年前まで一人の相棒が居た。

おそらくは、”結婚できるくらいに相性が良い異性”よりもつとずっと希少で大事
な、文字通りの半身と言つていいくらいの大切な相棒。

名をフィリップと言う。

翔太郎とフィリップは力を合わせ、地球の未来を左右できるような巨悪を打ち砕い
た。

しかしその代償として、フィリップはこの世界から消えてしまふ。

巨悪を打ち砕くヒーローだった翔太郎は、その結果すっかり意気消沈してしまつてい

た。

相棒を失い、熱量が減った熱血漢。

それが、今の左翔太郎という男だった。

(フィリップ……すまねえ。お前にああ言つて貰つたつてのに、俺は相変わらずダメなまんまだ)

翔太郎の脳裏に蘇るのは、フィリップの声。

——君の友である事は、僕の誇りさ

相棒のことを思い出して落ち込み、フィリップ相棒の言葉で立ち直る。

今の左翔太郎はちよつとだけ情けなくて、ちよつとだけ面倒臭かった。

(一人で気張らねえとな……)

左翔太郎は、この街を守る『仮面ライダー』だ。

頼れる師匠も、頼れる相棒も居ない。

けれど守るべき街がある以上、誰かがこの街を守らなければならない。

翔太郎は自分に言い聞かせるように、気合を入れ直した。

「すみません。入つていいですか？」

「！」

そして彼が気合を入れ直すと同時、事務所のドアを誰かが叩く。

依頼人だ、と思った瞬間、空気の抜けた風船状態だった翔太郎の様子が、空気を吹き込まれた風船状態に移行した。

「あ、ちよつと待つて下さい！」

パパパパつと、身だしなみを整えていく翔太郎。

声が女性のものであったと気付いたため、そこそこカッコいい帽子を選んで被る。

普段からちゃんとした格好をしていないのも、こうして依頼人が来てから慌てて身だしなみを整えているのも、実に固茹ハードボイルドで卵未満ハイフボイルドの半熟卵感がする。

「ん、んん、げふん。どうぞ、入って下さい！」

「失礼します」

「この鳴海探偵事務所のいぶし銀探偵、左翔太郎と申します。お嬢さん、今日はどんな依頼……」

そうして翔太郎は、今回の依頼人の顔を見て、硬直した。

「……………え？」

その依頼人にとって、左翔太郎は初対面だった。

左翔太郎にとって、この依頼人は初対面ではなかった。

「須藤 雪絵と申します。探しものがあるならここに行くべきだと、聞いたものですから」

園咲霧彦——須藤霧彦——の妹で、翔太郎と因縁浅からぬ女が、そこに居た。

園咲霧彦——旧姓、須藤——という男が居た。

この街を愛し、人の進化を手助けできると信じ、巨悪の手先になってしまっていた男。しかし真実に気付き巨悪に反逆、子供達を助けるために絶望的な強敵との戦いを切り抜け、街に住まう子供の未来を守った男。

同じく街を愛する男として、翔太郎も一目置いていた男だ。

……だが、愛に裏切りと悪意を返され、巨悪に飲み込まれるように死んで行つた。須藤雪絵という女が居た。

霧彦の妹であり、兄が死ぬその時まで、世界の裏側を知らない美しい女性であった。

だが、兄の死をきっかけに兄の日記を見て、兄の死の真相を知つた時。

彼女は復讐鬼となり、巨悪と同じ力をもって巨悪に挑んだ。

そして命こそ奪われなかったものの……その記憶の全てを失ってしまった。

翔太郎はこの二人と縁深く、この二人が辿った末路にも、苦い顔を見せたことがある。「私、記憶が無いんです。」

警察の人の話だと、ガイアメモリっていう危険な物に手を出しちやっただからだそうです。

その時、ここの探偵さんに迷惑をかけてお世話になったということを、耳にしまして

「……そうですか。いや、確かに俺もあなたのことは少しですが知ってます」

「ごめんなさい、ご迷惑をおかけしたみたいで……」

「いやいやいや！俺は迷惑とか思っていないからさ！ うんうん！」

そうして記憶を失った雪絵が、今翔太郎の前に居る。

翔太郎としても対応に困るに違いない。

ただでさえ、雪絵の容姿や雰囲気は翔太郎の異性の好みドンピシャだというのに。

「その上で、探偵さんに依頼したいんです。私の過去きのうを探すことを」

「……」

”きのうを探して”という言い回しに、翔太郎の眉が僅かに動く。

「兄が居る、ということを人から聞いても、兄の記憶は蘇らないんです。」

自分がしてたっていう研究の内容を聞いても、研究の記憶は蘇らないんです。

私の記憶きのうは、どこにも見当たらない……それが、とても不安なんです」

雪絵の言葉は、実感の無い悲痛さに満ちていた。

記憶が無いから、言葉が軽い。何にも薄い実感しか持てていない。

けれどもその悲痛さは本物で、彼女の不安も本物だった。

過去の自分という、人が自分自身を定義するために大切なものが失われた雪絵の苦
惱。

それを見て、翔太郎は帽子を少し押し上げ、一つの決断を下した。

「依頼、承ったぜ。あんたの”きのう”は、俺が必ず見つけてみせる」

「！ ありがとうございますっ！」

慣れた様子で、翔太郎は検索ボックスに入力するワードのような、いくつかの短い単語に要点をまとめて、口にする。

「キーワードは須藤霧彦、須藤雪絵、思い出の場所……って、違う。意味ねえだろ……」
「？」

キーワードから真実を見つけ出す相棒が居ない今、それに意味は無いというのに。

翔太郎はとりあえず、探偵の鉄則”足で探す”を実行しようとし始める。

「とりあえず、まずは色々回ってみないか？ 雪絵さん。」

思い出の場所とか、インパクトの有る場所とか、風都の名所とか」

「思い出の場所……」

「俺はあんたの兄のことを多少だが知ってる。ちよつとは役に立てるかもしれねえ」
「本当ですか!？」

いつの間にか、雪絵はうつすらとした信頼を翔太郎に向けていた。

無口で分厚い男が向けられる信頼ではなく、親しみやすい善良な男が向けられる信頼を集める。

そういう資質が、翔太郎には合った。

かつて翔太郎は雪絵に『『きのう』を探して』と依頼された。

けれど結果的に、その依頼の終わりに雪絵は全ての記憶を失ってしまった。

その結末に翔太郎が感じたのは、ほろ苦い後悔だ。

兄を殺した巨悪に復讐しようとしたかつての雪絵は、記憶を失うという形で巨悪に「殺さなくてもいい有象無象」と認識され、その命を永らえた。

そうして、今の雪絵がある。

もう彼女の命を脅かす巨悪は存在しない。

記憶が蘇っても、雪絵が巨悪に目をつけられ殺されるということはないだろう。

雪絵が抱えていた問題の幾つかは、時間が解決してくれたようだ。

過去を忘れられず、「きのうを探して」と翔太郎に依頼した、かつての雪絵。ハーフボイルドな翔太郎の中で、その依頼はまだ未達成のままだった。

この風都まぢに幾つかある、須藤兄妹の思い出の場所。

翔太郎は雪絵を連れてそれらを回っていたが、彼女の記憶は一向に蘇らなかった。探偵は物探しが得意とはいえ、探すものが人の記憶ともなれば、流石に手こずるようだ。

「ここで待っていてくれ、雪絵さん。その自動販売機で飲み物買ってくるから」
「あ、はい」

ある公園のベンチに雪絵を座らせ、翔太郎は近場の自動販売機に向かう。

(どうすりゃいいんだろうな……なあ、お前の妹だろ、霧彦。

俺はどうすればいい？ どうすれば記憶を取り戻してやれる？ 教えてくれよ……)
適当なお茶を購入する翔太郎。

頭の中で死人に呼びかけるも、答えは返って来ない。

その代わりに翔太郎の脳裏には、最後に聞いた園咲霧彦の言葉が蘇っていた。

——この街を、よろしく頼む

(なあ、霧彦……お前はどんな気持ちで、俺にあの言葉を言ったんだ……?)

霧彦が最後に残した言葉を思い出しながら、翔太郎はポケットの中からキーホルダーを取り出して、目の前に吊り下げる。

翔太郎が霧彦から託された、”ふうとくん”のキーホルダー。

そこには霧彦の街を愛する気持ちと、街を守るという覚悟が詰まっている。

(お前はどんな想いで、こいつを俺に託したんだ?)

あの日、園咲霧彦の死が報じられた新聞の一面を見た時、翔太郎の心の中に浮かび上がってきた気持ち、また彼の胸の内に蘇る。

(霧彦。最期にお前は、何を思って……)

翔太郎は頭を振って、自動販売機が吐き出したペットボトルを手にし、ベンチで待つ雪絵のもとに戻った。

「あ、翔太郎さん」

「どつすか雪絵さん。何か思い出したこととか」

「何も思い出せないんです。でも……」

「でも?」

雪絵は目を閉じ、この公園に吹く風を肌で感じながら、どこか懐かしげに語り始める。

「風です」

「風？」

「この風が……どこか懐かしくて、心地いい気がして……」

記憶が無くなる前に好きだった風が、雪絵の肌を撫でる。

心が憶えていなくても、体が覚えているのかもしれない。

この街に吹く風は、雪絵を優しく迎え入れていた。

（雪絵さん……あんたも風都の風、好きだったんだな）

翔太郎はこういうところに、雪絵と霧彦の血の繋がりを感じるのだ。

「あの……できそうになれば、適当な所で切り上げちゃって下さい」

「え？」

「元から無茶な話だったんです。記憶を探して欲しい、だなんて……」

医者の方にもできなかつたことなんです。できなくなつて、文句なんて言うわけない

です」

「……いや、受けた依頼は必ず完遂するさ」

翔太郎は帽子のつばを指で押し上げ、凜とした表情で、彼女に依頼の継続を告げる。

「俺はまだあんたの”きのう”を見つけてない」

「翔太郎さん……」

「行こうぜ。こんな短い時間で、風都の全てを見た気になられても困る」

手の形を銃のようにして、雪絵に向ける翔太郎。

そうして彼は彼女を連れて、街のいたる所を歩き回った。

「ほら、あそこでヘブンズトルネードやってる二人がいるだろ？」

あれを見て、なんかこう、精神的にビビッと衝撃が来て何か思い出したりは？」

「……いえ、特には」

「あそこに居るのはジミーってやつで、今でも時々路上ライブやってんだ。

どうだ？ この、心臓からゲロを吐きたくなる酷い音楽に何か感じないか？」

「内蔵を全て吐き出してしまいうような吐き気を感じます。記憶には何も……」

「リリイ白銀の大魔術！」

「わあ、凄いマジック！ でも記憶は全く戻りません！」

風都は広く、そこに住まう者達は非常に個性豊かだ。

それぞれが持つ個性の強さも、悪女の割合も、他の街と比べてかなりの高みにある。

脳への刺激が足りないということはあるまい。

なのに、雪絵の記憶は一向に戻る気配を見せなかった。

ならば足りていないのは刺激の強さではなく、刺激の種類なのだろう。

翔太郎と雪絵が何度か話した公園。

霧彦と雪絵が幼い頃育った施設。

生クリームが麵に絡まり、チョコメンマ・チョコ煮卵・アンコ入りチャーシューという核兵器の連打の如き衝撃を与える、スイーツラーメン。

本屋で買った、霧彦がデザインした風都君のイラスト集。

翔太郎の知り合いである、ウォッチャマンの写真情報、サンタちゃんからの人伝情報、クイーンとエリザベスからの女性視点の意見。

そのことごとくが空振った。

(やべえ、手詰まり感が出て来たな……)

こういう時亜樹子が居りゃあ、ヘンテコなこと言い出したあいつが埒を明けてくれるんだが)

須藤雪絵は、風都の風に何かを感じていた。

風都の何かをきっかけに記憶を蘇えらせる、という発想は間違っていないはずだ。

ただ何か、パーツが足りていないだけで。

「どうしましょうか、翔太郎さん」

「とりあえず一回事務所に戻って……ん？」

一旦事務所に戻ろう、と翔太郎が決めたその時。

何気なく歩いていた翔太郎が立ち止まり、雪絵を手で制して歩みを止めさせ、彼女を

庇うように一歩前が出る。

驚く雪絵が何かを言えるだけの間も置かず、翔太郎は物陰に声をかけた。

「おいそのヤツ。隠れてないで出てこい」

翔太郎の問いかけに返答を返すように、物陰から無言の『化物』達が現れる。

「！これは、警察の人から話に聞いていた、ドーパント……!?!」

「名乗れよドーパント。俺達の後をつけてた理由も白状しな」

『ドーパント』。

それは地球の記憶を宿した『ガイアメモリ』を使用し、怪物と化した人間の呼称。

翔太郎達の前に現れた怪物は二体。

片や緑色を基調とした、稲穂を人の形に束ねて花で飾ったようなドーパント。

片や橙色を基調とした、手を繋ぐ男女を象った石像のような、目の無い不気味なドーパント。

橙色の方は喋らないが、緑色の方は得意気に名乗りを始める。

『オーマ・ドーパント』

「オーマ・ドーパント……?」

「オーマ」という聞いたことのない、かつ名前から能力が全く想像できないメモリ名に、翔太郎は眉をひそめた。

問答で時間を稼ぎつつ、翔太郎はこっそり雪絵を物陰に逃がす。

「お前は生け贄だ……風都の仮面ライダー！」

緑色のドーパントと橙色のドーパントが、翔太郎に接近する。

翔太郎はそれに対抗し、自分のベルトと力を取り出す。

彼の相棒、フィリップはもう居ない。

けれども、それは彼が戦えないということの意味しない。

ドーパントを前にした彼の心に、今は居ない相棒の声が蘇っていく。

——なあ、約束してくれ。たとえ一人になっても、君自身の手で、この風都を守り抜くと

ただそれだけで、戦いに臨む左翔太郎の心は、何にも勝る切り札となる。

(分かっているさ、フィリップ)

翔太郎がたった一人で、二体のドーパントを片付けようとした、その瞬間——

「死ねえっ！」

——輝ける青色が、現れた。

「どりやあっ！」

「何?!? ぐあっ?!?」

学生服を着た青年が、その右拳で緑色のドーパントを殴り飛ばす。

その拳は、翔太郎と雪絵にはただの拳にしか見えぬ、されどドーパント達には青い光

を纏う輝きの拳に見えていた。

学生服の青年は素手でドーパントを殴り飛ばし、威風堂々に名を名乗る。

「俺の名前は玖珂光太郎！ 悪をぶつとばす青年探偵！」

彼の名は玖珂光太郎。左翔太郎と出会うべくして、出会った青年。

「ぶつとばされてお縄になるか、お縄になってぶつとばされるか！ どっちか選べ、この悪党！」

翔太郎と光太郎。

二人のHEROの運命が、今ここで交差した。

Kの者達／仮面ライダー

黒い学ランを着た青年は、ニカッと笑って拳を構える。

その笑顔には、底無しのバカのみが持てる輝きが宿っていた。

誰もが困難との衝突や大人になる過程で失っていつてしまおう、真っ直ぐな輝きが宿っていた。

「女の人を守ろうとしてる男。

怯える女の人。

物騒なこと言いながら迫る怪物。なら、決まりだ。お前らが悪党だな！」

玖珂光太郎と名乗った青年は、極めてシンプルな在り方を口にする。

「この……ガキが！」

ぼく達はこれからこの男を殺さねばならんだ！ 邪魔をするな！ お前から殺す

ぞー！」

緑のドーパントが、光太郎を恫喝する。

橙のドーパントは無言のまま、じりじりと距離を離していた。

「危ねえぞ坊主。こいつらが悪党だろうってのは同意見だが……」

なら、そういう悪党と戦って街を守るのは、俺の役目だ」

翔太郎もまた、光太郎の拳の威力に驚きつつも、光太郎の身を案じて下がらせようとする。

光太郎の登場に三者三様の反応を見せる、男達。

「人様に迷惑かけるのを何とも思ってなさそうなのが悪党。」

そいつから何かを守ろうとするのが正義の味方。なら、あんたは正義の味方だろ？」

「あん？」

「怪物相手なら、手助けが要るんじゃないか？」

光太郎の言葉に、翔太郎は面白そうなものを見る目で光太郎を見る。

「いや、俺一人で十分だ」

翔太郎が腰にドライバーを当てると、ドライバーからベルトが展開され、彼の腰に固定される。

《 JOKER! 》

更に手にしたガイアメモリを操作すれば、翔太郎の手の中で黒紫のメモリが叫んだ。

「変身」

ドライバーに刺さるメモリ。

『変身』の一言と共に、変わり始める翔太郎の身体。

《 JOKER! 》

メモリの音声に驚いて光太郎が振り向いた瞬間、翔太郎の姿は変わる。

ほんの一瞬。

ほんの一瞬で、翔太郎は黒と紫を基調にした『仮面ライダー』に姿を変えていた。

「な……なんじゃそりゃ?! かつけー!」

「俺は仮面ライダー、ジョーカー」

変身を終えた翔太郎は、驚く光太郎の横に並び立つ。

そして左手をスナップして、二体のドーパントを睨みつけた。

「下がってな坊主。こっからは、俺の出番の風向きみてえだ」

「足手まといにはならねーよ。でっかい船に乗ったつもりでいいぜ!」

「つたく」

変身した後の翔太郎には、変身前の翔太郎には見えていなかったものが見えていた。

玖珂光太郎の右拳が纏う『青い光』である。

ガイアメモリの力が、翔太郎に“それ”を見る力を与えているようだ。

変身前は見えなくて、変身後には見える光。

そんなものを纏っていたとなれば、翔太郎が光太郎を見る目も変わる。

翔太郎は変身していない人間の耐久力をちよつと心配するも、振れもしない剣を引き

ずりながら生身でトリガー・ドーパントに挑んだ人間を思い出し、光太郎の参戦を受け入れていた。

「遅れるなよ、コータロー！」

「おう、ジョーカー！」

光太郎は橙の敵を。

翔太郎は緑の敵を。

それぞれに狙い、戦いを挑む。

「てめえら、財団Xか？ それともミュージアムの残党か？ それとも別の何かか？」

目も無く、口はあるのに言葉も無い、そんな橙のドーパントにジョーカーの拳が飛ぶ。

ドーパントはガードでその拳を防ぐが、ジョーカーはすぐさま打撃を投げに切り替えた。

拳が当たるはずだった場所に、当たる掌。殴る拳を掴む掌に変え、ドーパントがガードに使った腕を掴み、ジョーカーは綺麗な投げを決めた。

路面に叩きつけられ、呻き声を上げる橙色のドーパント。

「まあいい。叩きのめしてから、全部吐かせてやる！」

ドーパントは立ち上がりながら、起き攻めを仕掛けて来るジョーカーを見て、ジョーカーの顔面に拳を放つ。

しかしジョーカーは橙の腕を取り、極める。

関節技がドーパントの腕を取り、折るにこそ至らなかったが、その腕を使い物にならない状態にさせる。ドーパントが、苦悶の声を漏らした。

ジョーカーはそこから、関節を極めたドーパントの顔面を踏みつける。

「らあッー」

続く攻防。

橙のドーパントは地味であつても確実に、かつ一方的にダメージを与えられている現状をひっくり返すため、全身から橙色のエネルギーを放出・爆発させる。

ジョーカーはあえなく浮かされ、吹っ飛ばされてしまった。

しかしジョーカーは空中で姿勢を整え、吹っ飛ばされた先にあつた街路樹を踏み、木に足着けると同時にジョーカーメモリを手取る。

そしてマキシマムスロットに突き刺し、メモリの力を最大限に開放した。

《 JOKER! MAXIMUM DRIVE! 》

同時に、木のしなりとジョーカーの脚力を重ね合わせて跳躍。

一直線にすつ飛んで行って、橙のドーパントの胸に強烈な飛び蹴りを叩き込む。

「ライダーキックー」

叩き込まれたエネルギーがドーパントの内部に染み、人体と融合していたガイアメモ

りの力のことごとくを粉碎し、暴走したエネルギーが大爆発を起こした。

左手をスナップするジョーカーの背後で、広がる爆炎。

爆炎が消えれば、そこには少し怪我をしただけの人間が転がっていた。

「……………いつ……………ドーパントに変身してたこいつが着てた服……………」

加頭順と同じ、財団Xの野郎が着てた服か？ キナ臭くなつてきやがった」

砕けた”O”のメモリに、財団Xの代名詞の一つである白いスーツ。

敵の正体に当たりをつけつつ、翔太郎は光太郎の方の戦いを見た。

緑のドーパントはツルを伸ばす。葉を飛ばす。枝を突き出す。

その攻撃の全てが植物を使ったものでありながら、鋼鉄をも裂く威力を持つ。
なのに。

どの攻撃も、玖珂光太郎には届かない。

「お前、お前、お前……………何者なんだ!？」

「俺の名前は玖珂光太郎！ さつき名乗つたら、この悪党！」

光太郎の両の拳には青い光が宿っていた。

それは拳撃のたびに緑のドーパントが放つ攻撃を叩きのめし、粉碎する。

ただひたすらに敵の攻撃を殴り落としながら、光太郎は一直線に敵へ向かって駆けていた。

ただ真つ直ぐに突き進むバカは、敵からすれば恐怖の一言だろう。殺すつもりで攻撃を放つたのに、光太郎は止まらない。

一旦動きを止めようと考えてから攻撃しても、光太郎は止まらない。

とにかく物量を叩き込まねばと連射連打を繰り返しても、光太郎は止まらない。

こつちに来るな、来ないでくれと、祈りながら攻撃しても、光太郎は止まらない。

全ての攻撃を”無駄な足掻き”と化しながら、光太郎はドーパントの目の前にまで辿り着く。

「来るなあー！」

緑のドーパントが植物を根を模した槍を突き出し、光太郎が頭を下げたそれを避ける。

「行くかどうかは、俺が決めんだよ！」

そしてカウンター気味に、ドーパントの腹に、青い光を纏わせた右拳を叩き込んだ。

「そんでもって！ 悪党を殴るかどうかも俺が決める！」

拳の衝撃と、青い光がドーパントの胸に叩き込まれる。

「か、はっ……」

光太郎の拳の一撃は、人体と一体化していたガイアメモリだけを、見事に粉碎していた。

「うしっ」

「おいコータロー!? 今お前、素手でメモリブレイクしたのか……!?!」

先に戦いを終えていた翔太郎が、驚きながら光太郎の腕を掴み上げた。

メモリブレイクは人を殺さず、その力だけを壊すガイアメモリ破壊の行為であり、ガイアメモリがあれば誰でも使えるというものでもなく、ましてや素手でできるものでもない。

ただのパンチで、人を殺さずその力だけを殺すことなど、できるわけがないのだ。

しかし、玖珂光太郎にそんな理屈は通じない。

彼の拳は心の拳。

悪党ならば殴って倒す、良い奴が間違えた時は殴って正気に戻す、そんな“当たり前”を尋常でない形で実現させる想いの拳である。

「メモリブレイク? なんだそれ?」

「いや、そもそもお前は何者なんだ?」

「俺の名前は玖珂光太郎! 悪をぶつとばす青年探偵! あんたは? ジョーカー!」

「む……俺の名前は左翔太郎。ハードボイルドな青年探偵だ!」

「お、俺と同じ探偵か！」

「そういうお前も探偵か！」

一見噛み合っていないようでこの上なく噛み合っている二人の会話を見ながら、雪絵は呆けた口調で言葉を漏らした。

「凄い……圧倒的だった……」

彼女は怪物を倒すHERO達のあまりに圧倒的な戦いを見て、少しばかり、左翔太郎と玖珂光太郎という人間に対して抱いていた第一印象を、改めていた。

玖珂光太郎は、とある世界で自分の街を守るために戦った青年だ。

”街を守るために戦う”という意味では、極めて翔太郎に近い存在と言える。

彼は戦いの最後に、東京に落ちそうになっていた空中要塞（ねじれた城）を落とさないうえ、城を連れて別の世界へと旅立って行った。

そうして光太郎は、自分の世界から遠い世界に城をポイ捨てし、ポイ捨てという名の

封印を施してから自分の世界に帰ろうとしていた。

玖珂光太郎は世界を渡る。

世界を渡り、帰路の途中で修行をこなし、自らを鍛え上げていく。

翔太郎達の世界に居るのは、自分の世界に帰る途中に、ちよつと足を止めたただけだといふ。

一言でまとめてしまえば、玖珂光太郎は異世界から来た街を守る青年探偵。

風都を守る探偵ではないが、それでも翔太郎が奇縁を感じる男であった。

翔太郎&光太郎は、メモリブレイクで気絶した男達を縛り上げつつ、互いの身の上を語りつつ互いが持つ情報を交換していた。

「悪をぶつとばす青年探偵……いいな、格好良いな」

「ハードボイルド……いいな、格好良いな」

「だろ?」

「だろ?」

しかもこの二人、妙に気が合った。

「俺は街を守る仮面ライダーで……」

「俺は街を守る正義の味方で……」

「……」

「……」

「街を愛してる奴に悪い奴は居ないな、うん」

左翔太郎とフィリップが、真逆のタイプが噛み合った最高のコンビであるのなら。

左翔太郎と玖珂光太郎は、初対面から親友になれるタイプのコンビであった。

「ジョーカー、あんたいい帽子被ってるな」

「お？ そうか？ この帽子、お気に入りだな」

「俺に探偵のイロハを教えてくれるオッサンの所長が居てさ。」

その人がやたら帽子の似合う探偵なんだよ。

だから俺は知ってるんだ。帽子が似合う探偵に、悪い奴は居ないってさ」

「――！」

帽子が似合う男、と言われて翔太郎も悪い気はしない。

ちよつと、というかかなり嬉しそうだ。それを顔に出す当たりが実にハーフボイルド

である。

しかも『帽子が似合う』『探偵の師匠』『探偵事務所の所長』と聞けば、翔太郎は色々

と思いついて”重ねて”しまう。

「……その所長は、まだ生きてるのか？」

「？ そりゃ生きてるけど、どうかしたのか？」

「いや、大事にしろよ。そう言いたかっただけだ」

翔太郎と光太郎は、何を話しても話が弾んでしまいそうだ。

この二人にない細やかな空気読みスキルを發揮した雪絵は、このままだと話が明後日の方向に行つたまま何時間も帰つて来ないこともあり得ると思ひ、二人に話を振る。

「あの、それでこのドーパントに変身していた人達、どうするんですか?」

「照井……俺の知り合いのデカに連絡しておいた。その内連行されるはずだ」

「そうですか」

ほっと一息つく雪絵。安心した様子の雪絵をよそに、翔太郎は緑のドーパントに変身していた方の男の頬を、ピンタし始めた。

「おい起きろ。起きろ! いつまで寝てやがる!」

「気絶したまんまにしておかないのか? ジョーカー」

「尋問だ尋問。こいつらが財団X絡みだと、情報の速さが命取りになりそうだからな」

最初はペシペシと、途中からビシビシと、最終的にバチンバチンと頬を叩く段階になって、ようやく緑のドーパントになっていた男は目を覚ます。

「うーんうーん……痛い痛いぼくちんMじゃないっす……って仮面ライダー!?!」

「おう、仮面ライダーだ」

「それにさっきのこわいガキ!? って、ぼく縛られてる!?!」

「俺の名前は玖珂光太郎！　ってこれ三度目だな……」

「お前もいちいち名乗らなくていいんだよ、コータロー。」

「おいお前。なんで俺達を襲った？　目的は？　作戦は？　他に仲間は居るのか？」

「はいはいはいはいなんでも喋りますッ！」

「……財団Xのやつっぽくない口の軽さだな。お前本当に財団Xか？」

「しようがないじゃないですかあ！」

「ぼくらアイン様と一緒にセプテントリオンから来たばつかなんですから！」

「セプテントリオン〜？」

異様に口が軽かった敵が口にした『セプテントリオン』という言葉に、彼らが見せた反応も三者三様。雪絵は一から十まで話についていけないため表情は変わらず、翔太郎は聞き覚えのない名前に首を傾げ、光太郎は聞き覚えがあつたが覚えておらず、思いつく出そうともしていなかった。

「はい、セプテントリオンです、はい。」

財団Xの上位組織みたいな感じです、はい。

白と呼ばれる者達を中心になって出来た組織で、トップは白の白と呼ばれています。

財団Xの白いスーツは、セプテントリオンに敬意を表したものであるとか聞いていま

す、はい」

「……おいマジで勘弁してくれよ……財団Xの後ろ盾とかなんだそりゃ」

翔太郎は現状でも財団Xを倒せる見込みが無いというのに、それより更にデカイ巨悪が見えてきたことにクラッとするが、話を続けさせる。

「二つの街を影響下に置ける規模の組織がミュージアム。

複数の国に跨って一つの星を影響下に置ける規模の組織が財団X。

複数の世界に跨って影響を及ぼす規模の組織がセプテントリオンです。

あの、これだけ喋れば、せめてぼくだけの命は助けてくれますよね？　ね？」

「命乞いは後にしやがれ。……おいおい、話の風向きが怪しくなってきたな」

「おいジョーカー、他の世界があるってのは本当だぞー」

「ああ分かってるっての。コータローのその辺の話信じてっから、俺は頭抱えてるんだよ」

「翔太郎さん、私はずっと頭を抱えています」

「そうだよな、雪絵さんの記憶も取り戻さなきゃならないんだよなあ……!」

翔太郎は一人で踏ん張らないと、と思いつつも、けっこういっばいっばいだった。

「それですね、ぼくら仮面ライダーを血祭りをあげようって計画を立てていました」

「ああん？　俺を血祭りい？」

「ひい！　すみませんすみません！

でも仮面ライダーを殺せばウチのトップのアイン様が出世させるって約束だったんです！

でも玖珂光太郎さんが現れたことで、当初予定してた作戦は全部おじゃんになっててですね！」

「作戦ねえ」

「まずは俺達二人のオーマ・ドーパントで仮面ライダーの足止めをしまして！

狭い所に追い込んでオーマ・ドーパントを三人追加して！

それで五人で痛めつけた後アイン様がトドメを刺すって感じで！

あ、オーマメモリは使用者の個性に応じて違う特性を發揮するんです！

それでアイン様が出世すれば、アイン様はこの世界の管理権と必要な力を貰えるって話で！」

「……何？ 世界の管理権だと？」

「睨まないで睨まないで！

それに必要な人材とか、武器とか兵器とか貸して貰えるって話で！」

「第一なんだ、そのアイン様ってのは？」

「アイン様は——」

翔太郎が敵のボスの素性を聞き出そうとした、その時。

ペラペラと喋っていた緑のドーパントの変身者と、気絶したままだった橙のドーパントの変身者が、その喉と心臓を遠距離から貫かれた。

「何!？」

「……あ」

狙撃だ、と気付いたその瞬間、翔太郎と光太郎は跳んで雪絵を守る位置に立つ。

遠方のビルの屋上に黄、赤、黒のオーマ・ドーパントが見えた。

狙撃の下手人はあの三体のドーパントと見て間違いはあるまい。

「喋りすぎだ」

赤のドーパントが発した言葉に、翔太郎と光太郎は不快感に顔を歪める。

あの三体のドーパントは、仲間を殺したのだ。

それも、緑のドーパントの変身者を、自分達にとつて不都合な存在になったというだけで。橙のドーパントの変身者を、自分達に不都合な存在に”なるかもしれない”というだけで。

躊躇いも後悔もなく、仲間を殺したのだ。

「ジョーカー! 口封じだ! 悪党の得意技!」

「分かっている!」

敵ドーパントの出現に、翔太郎は反射的に変身した。

「変身」

《 JOKER! 》

仮面ライダージョーカーになった翔太郎と、両の拳に青い光を宿した光太郎が、雪絵を攻撃させないように立ち回りを選ぶも、ドーパント達は攻撃を仕掛けて来ない。

怪訝そうに警戒を続ける翔太郎と光太郎の背後で、雪絵が恐る恐る口を開いた。

「どうしたんでしょうか？ 姿を見せるだけ見せて、こつちにも来ないで……」

「案外、ボスの到着を待ってたりして」

雪絵の疑問に、光太郎がおちやらけて答えると、翔太郎が交差点の向こう側を見て目を細める。

「……お前の予想、大当たりみたいだぜ、コータロー」

園咲琉兵衛。

加頭順。

大道克己。

左翔太郎が今日まで戦って来た男達の中でも、とびつきり強い男達のみが持っていた存在感。

それを持つ若い男が、一人の女性を連れて、そこに立っていた。

男は、心の歪みが顔に出ているような男だった。

卑屈な人間、いやらしい人間の性格が、顔に出るのと同じだ。

その男は顔つきにも、その顔に浮かぶ表情にも、歪みが現出している男だった。

女は、心の無さが顔に出ているような女だった。

人間であるのは確かなことなのに、どこか“不気味の谷”にすら見える。

無表情過ぎて、顔が動かなすぎて、それが人間であるかも怪しく思える女だった。

そして二人とも、財団Xの白いスーツを身に付けている。

男は交差点の向こうで暇潰しと代わりに指を鳴らし、翔太郎達三人が自分の存在に気付いたことを認識すると、おぞましく笑った。

「にひっ」

左翔太郎は身構える。

玖珂光太郎は拳を構える。

須藤雪絵は少し怯えた。

その笑顔は一般人ならば、恐怖を感じて当然のもの。

そして多くの戦いをくぐり抜けた戦士には、「こいつはとてつもない被害を出す」と直感させる笑顔だった。どこか頭のネジが外れた狂人だけが、浮かべる笑顔だった。

「俺の名はアイン。この女の名はツヴァイ」

「てめえか、あいつらの親玉は」

「その通り」

アインと名乗った男はおぞましく笑う。

遠くのビルの上で、静観を貫くドーパント達。

男の背後で、何の感情も見せずに佇むツヴァイという女。

どれもこれもが、不気味だった。

「俺達に血の繋がりは無いが……人は俺達のことを、『地獄兄妹』と呼ぶ」

「地獄、兄妹……」

アインは『R』のメモリを手にし、眉間のコネクタに突き刺した。

「始めようか、仮面ライダー。お前達の最期を」

《《 RETURN! 》》

そして、その体を怪物と化す。

その姿はまさしく怪物にして人形。

ガラスのように透明で、どこにも起伏のないマネキンのような姿。

特徴をとことん排除した形状が、逆に特徴になっていた。

(リターンズ・ドーパント……)

「リターンズメモリは『再来』の記憶を持つメモリ。

その土地の記憶を参照し、その土地に住まう人間の記憶を参照するメモリだ。

この場で戦う限り、言ってしまうえば……”風都”そのものを丸ごとガイアメモリに見立てられる」

「風都を丸ごとガイアメモリに見立てる!？」

アインが指を鳴らすと、リターンズ・ドーパントの体が輝き始めた。

”土地”に接している足裏から、リターンズ・ドーパントが必要な記憶を吸い上げる。

そしてドーパントの体を包む光が消えた時、その体は全く別のドーパントの姿となっていた。

「風都は全てを覚えている……こんな風にな」

翔太郎が忘れるわけもない、『ナスカ・ドーパント』の姿に。

「ナスカ……だと!？」

ナスカの姿になったアインは、更に指を鳴らしてツヴァイという女に合図する。

「ツヴァイ。メモリを覚え」

「了解しました」

《 SKULL! 》

ツヴァイは服をはだけさせ、大きな胸の合間のコネクタに、メモリを挿す。

そしてツヴァイもまた、翔太郎が忘れるわけもないスカルメモリを使い、『スカルドーパント』の姿へと変貌した。

「ナスカの次は……スカル……霧彦のナスカに、おやつさんのスカル……!？」
雪絵は新たな怪物の出現に一步後ずさる。

だがそんな彼女よりもはるかに、翔太郎が受けた心的衝撃は大きかった。

かつてこの街を愛した男、園咲霧彦が使用したナスカの力。

かつてこの街を愛した男、鳴海荘吉が使用したスカルの力。

それが今、悪の手の中にある。

呆然とする翔太郎に代わり、そこからは光太郎がアインを問い糾し始めた。

「何が目的だこのやろう!」

「色々あつてな……俺達は、この世界が嫌いなんだ。

憎んですらいる。

だから実験材料として全人類をしゃぶり尽くして、苦しめ尽くしてから……皆殺しにするのさ」

「！」「！」「！」

リターンズ・ドールパントことアインの目的は、仮面ライダーを倒すこと。

そして仮面ライダーを倒し、セプトトリオンから世界の管理権を貰うこと。

管理権と共に得た戦力で、この世界の人間全てを最大限に苦しめてから、皆殺しにすること。

有り体に言つて、最悪だった。

「そんなこと……させるかよ！」

ナスカとスカルに！ そのメモリに、そんなことの片棒を担がせてたまるか！」
ナスカとスカルを目の前にして、少し気の抜けていた翔太郎の体に気合が入る。

させてたまるかと、決意が滾る。

滾る脳裏に、フィリップの言葉が蘇る。

——止めるさ……何度でも……この左翔太郎が、街に居る限り

この街を守るために散って行った男達の思い出は、いつも翔太郎の胸の中にある。
だからこそ戦うのだ。

仮面ライダージョーカーは。

そこに悪がある限り。

「アイン、ツヴァイ……お前達の罪を数えろ！」

そしてここには、翔太郎と心を同じくする友が居る。

「力を貸してくれ、コータロー！」

「任せろ、ジョーカー！」

心のままに悪を討つ、青い光の青年探偵。

折れず曲がらずうつむかず、前に進み続ける三国一のいい男。

その輝きは、豪華絢爛である。

「俺の名前は玖珂光太郎！ 悪をぶつとばす青年探偵！ お前の野望もここまでだ、悪党！」

黒い学ランの青年と、黒い仮面ライダーの青年は、そうして肩を並べて駆け出した。

スカル・ドーパントことツヴァイは、接近してくる二人の敵に対し、アインに指示された通りの反撃を放つ。

「やれ、ツヴァイ」

「我は白にして白に要求する

それは一人の女よりはじまる女の鎖

白にして白骨の我は 万古の契約の履行を要請する

今は亡き情熱を 今ひとたびここに捧げさせ賜え

我は生み出す贖罪の檻 我は号する心を縛る美しき牢獄

完成せよ 『絶愛の檻』

スカルの突き出した腕に応じるように、視界を埋め尽くすほどのイバラが現れ、光太郎とジョーカーに襲いかかった。

「なんだ!? これはスカルメモリの能力じゃねえぞ!」

「魔女とか魔法使いとかいうやつだ、ジョーカー! 俺の世界とかに居た!」

「スカルメモリに別の力を追加してやがるのか!」

光太郎は茨の津波とでも言うべきそれに、拳を叩き込む。

すると炸裂した青い光が、イバラの大半を吹き飛ばした。

流星にこれは予想外だったのか、アインが少し驚いているのが見える。

「こっちは俺が相性いい、任せろ!」

「任せた、コータロー!」

光太郎はスカル・ドーパントに。

翔太郎はナスカ・ドーパントに。

それぞれ向かい、それぞれの信念を載せた拳を振り上げる。

「園咲冴子といい、お前といい……霧彦のメモリを、どんだけバカにすりや気が済むんだ！」

「知ったことじゃあないな」

ジョーカーの拳を、ナスカは軽々と受け止めた。

この両者の間には様々な要因があり、倍に近いスペック差が存在している。

それは例えるならば、50m走5秒の人間と50m走10秒の人間が競争するようなもの。

しかし翔太郎は、そのスペック差を技量一つで埋めていく。

「うらあつー！」

ナスカ・ドーパントが振るうナスカブレードを、ジョーカーは紙一重でかわしていく。

それも、踏み込み次第で拳を届かせることができるような距離でだ。

ナスカの剣を振るうアインは、舞い散る木の葉を剣で切ろうとしているかのような、そんな手応えの無ささを感じていた。

更にジョーカーは、ナスカの顔面に右ストレート。

ナスカが剣の腹でそれを受け止めたのを見て、顔近くに構えた剣のせいでナスカの視

界が一部塞がれたのを確認し、一瞬遅らせたキックを放った。

ジョーカーの足裏が、踏み砕くように、ナスカの伸びきった膝に当たる。生身対生身であれば、これで膝を逆向きに折れていたであろう一撃。

しかしナスカの耐久力のせいで、この一撃は痛みを与えるに留まった。

「む」

翔太郎は顔を攻めてそこに意識と防御を集め、腹に拳を叩き込む。

腹を攻めてそこに意識と防御を集め、顔に拳を叩き込む。

この二つを流動的に、敵の動きを見つつ織り交ぜる。

迂闊なガードをすればそこから投げ、あるいは関節技に繋げる。

仮面ライダージョーカーに、高いスペックはない。

あるのは技だけだ。

ただ技だけで、翔太郎とジョーカーは十二分に強い。

ナスカはたまらず、後ろに下がろうとする。

しかしそこで翔太郎は、後ろに下がろうとしたナスカの右足の力カトに、左足を引っかけた。

バランスを崩し、転びそうになるナスカの顔面に、容赦なく叩き込まれる右ストレート。

そうしてジョーカーは、文字通りにナスカを殴り飛ばした。

「つ……なるほど、ナスカの力では勝てない、か」

「ナスカが弱いんじゃないやねえ。お前が弱いんだよ！」

仮面ライダージョーカーは、力強く拳を握り、力強く叫ぶ。

「霧彦のナスカだったなら！ 一人で戦ってる時の俺が、勝てるわけがねえんだ！」

左翔太郎は、今でも園咲霧彦との戦いを覚えている。

その攻撃の重さも、速さも、鋭さも。

巨悪に利用されていたとはいえ、霧彦の街を愛する気持ちは本物だった。

だから、強かった。

リターンズ・ドーパントのナスカは、園咲霧彦のナスカの強さには及ばない。

アインはふむ、と少し納得した様子だ。

ジョーカーに圧倒されてなお、その余裕は崩れない。

何故余裕が有るのか。翔太郎から向けられる怪訝な視線を受け止めつつ、アインは指を鳴らす。

「なら、こういうのはどうか？」

すると、土地に接する足裏から、リターンズ・ドーパントの体に街の記憶が吸い上げられる。

地球が、土地が、町の人々が抱えていた、特定の対象の記憶が、ドーパントに馴染んでいく。

遊びのナスカはもうおしまい。

そうしてまた、アインは姿を変えた。

仮面ライダージョーカーを倒すため、最初に想定していた姿に、『変身』した。

「……え」

赤い目、緑の右半身、黒の左半身。

たなびくマフラー。

見慣れた姿。

半年前までなら、鏡でも見ているのかと、翔太郎は錯覚していたかもしれない。

『仮面ライダーW^{ダブル}』が、そこに居た。

「仮面ライダーW^{ダブル}——リターンズ」

かつて翔太郎とフィリップが力を合わせ、変身していた仮面ライダーと同じ姿と力を得て、アインは含み笑いを漏らす。

「これが仮面ライダーを倒し、この憎い世界を滅ぼす……『憎しみのW^{ダブル}』だ！」

愉快そうなアインとは対照的に、翔太郎は激怒した。

「てめええええええっ!!」

その思い出に触れるな。

その思い出を汚すな。

その思い出は、お前のものじゃない。

感情が煮え滾り、燃え滾る。左翔太郎は冷静さを失い、その怒りの熱を拳に込めて振るう。

《HEAT! METAL!》

だが返って来たのは、その怒りの熱よりも熱い炎の一撃だった。

アインはメモリを挿し直す作業すら行わぬままにメモリをチェンジし、燃える金属の棒でジョーカーの顎をカチ上げる。

「がッ……!」

ジョーカーの体が浮いて、アインが仮面の下でにひつと笑った。

《LUNA! TRIGGER!》

またしてもメモリの差し替え無しで姿を変えたアインの手には、トリガーマグナム。

そこから放たれた追尾弾のビームが、浮いたジョーカーの体を滅多打ちにした。

「かつ、はっ、あっ!」

リターンズ・ドーパントはそのまま、トリガーメモリをトリガーマグナムにセット、ジョーカーの着地と同時に銃口を空に向け、マキシマムドライブを放つ。

《 TRIGGER! MAXIMUM DRIVE! 》

すると空に放たれた弾丸がそれぞれ曲がり、正確無比かつ空から降り注ぐ狙撃攻撃と化した。

「うわっ!」

『絶技』と呼ばれる特殊技能を身に付けたスカル・ドーパントという、最悪に反則な存在をも圧倒し、トドメを刺そうとしていた光太郎が、慌てて回避・迎撃行動を取る。

この攻撃は、翔太郎と光太郎の両方を狙っていた。

翔太郎は地面に転がされていたが、あえて立ち上がらず、地面を転がることでビームの追尾弾を地面にぶつけて消失させる。

「^{ダブル}Wは……お前みたいな奴が! ましてや一人で! 使っていいもんじゃねえんだよ!
!」

そうして諦めず立ち上がり、憎しみの^{ダブル}Wに立ち向かうジョーカー。

「所詮道具だ。誰が使おうと使うまいと、文句を言われる筋合いはない」

アインはそれを見て、更に容赦なく力を見せつけようとする。

《 CYCLONE! JOKER! XTREME! 》

通常のダブルドライバーでは鳴らないはずの音声が鳴り、メモリの挿入無しでまた姿が変わる。

「エクストリームまで……!」

緑と黒のサイクロンジョーカーは、ジョーカーの倍のスペックを誇る。

サイクロンジョーカーエクストリームともなれば、サイクロンジョーカーの1.5倍、2倍のスペックとなる。ジョーカーメモリ単体の力で勝てるはずもない。

「ぐっ……!」

「ほらほら、どうした? 弱いのはメモリではなく、俺なんだろう? 勝ってみろよ」

サイクロンジョーカーエクストリーム

C J Xの力に、押されるジョーカー。

左翔太郎の全能力を用いて、彼は三倍以上のスペック差のある攻撃を捌き切っていた。

C J Xが素手で攻めているからとはいえ、翔太郎の技量の高さが伺える。

仮面ライダージョーカーはそうして耐えながら、勝機を探していた。

「俺は記憶を吸い上げ、再来させることができる。」

そして吸い上げた記憶を「混ぜて」から、再来させることもできる「

「それがどうした!」

「ありえなかつたもの」まで再来させることができるといふことさー!」

だが、アインは勝機を見つける余裕など与えてくれない。

《 HEAT! METAL! XTREME! 》

「何?」

ヒートメタル・エクストリームに姿を変えて、アインはジョーカーを殴り飛ばす。

ヒートメモリの炎、メタルメモリの力が、エクストリームメモリによつて最大限にまでその特性を発揮した——という仮定を再来させた——、一撃。

ジョーカーの装甲に、ヒビが入る。

「ぐああつ!」

《LUNA! TRIGGER! XTREME!》

リターンズ・ドーパントは、重量級近接型から、ルナトリガー・エクストリーム遠距離火力型にフォーム・チェンジ。続けて放たれた追尾光弾を、ジョーカーは回避して地面や電柱に当てて消滅させ、かわしきれないものは拳で叩いて弾く。

ジョーカーの装甲に包まれた拳の骨が、ミシリと音を立てた。

「ダブルWを……俺達のダブルWを……よくも……!」

仮面ライダーWがダブルかつて使用していた、九種の形態。

それら全てをエクストリームの力で倍加させ、アインは翔太郎を攻め立てる。

死ぬ気で敵の猛攻を受け流す翔太郎は、かつてフィリップから聞いた言葉を思い出していた。

——僕は大事な事を忘れていたんだ

忘れるわけがない。その言葉が翔太郎を立ち直らせ、エクストリームに至らせたのだから。

——鳴海壮吉の意志を受け継いだWは、戦闘マシンであつてはならない
フィリップは、『仮面ライダー』を、『W』を、特別なものと見ていた。

——強いだけのWに価値はない。君の優しさが必要だ、翔太郎
フィリップの言葉を思い出している翔太郎の顔面を、Wが殴る。

——それがもし、弱さだとしても……僕は受け入れる
今のWは、ただ人を殺すためだけの戦闘マシンだった。

優しさなんてどこにも無い。

罪を憎んで人を憎まないという、仮面ライダーに求められる在り方も無い。

今この世界に唯一居存在するWは、憎しみで人を踏み躪る『悪』の存在だった。

「ちく、しょう……！」

スタボロになり、膝をつくジョーカー。

翔太郎の心は折れていないが、体の方がもう限界だった。

「ヤッ！」

リターンズ・ドーパントはジョーカーを追い詰め、なおも止まらない。

指を鳴らして、更に自己強化を繰り返す。

《 CYCLONE! ACCCEL! XTREME! 》

そうして、彼らが手にしなかった可能性の力を、その身に体现した。

「お前達が至らなかつた『可能性』で……お前を殺してやろう」

青い目、緑の右半身、赤の左半身。

ありえなかつた可能性。

どこかの誰かの記憶の中になしか、存在しなかつたW^{ダブル}。

「サイクロン、アクセル、エクストリーム……!?!」

「これが俺の『憎しみのW』^{ダブル}、究極形態。お前を殺す力だ」

『仮面ライダーW^{ダブル}・CAX』。

再来のメモリを異常なレベルで使いこなしているアインの手によって、この世界に形を結んでしまった”究極のW^{ダブル}”。

それが、メモリがセットされた盾を掲げる。

《 CYCLONE! MAXIMUM DRIVE! 》

《 HEAT! MAXIMUM DRIVE! 》

《 LUNA! MAXIMUM DRIVE! 》

《 JOKER! MAXIMUM DRIVE! 》

盾は四つの光を収束し、収束された光は、アインが盾から抜いた短剣に内包されてい

た。

アインは人知れずにひっと笑い、右手で剣を振り下ろす。

本来刀身に四色の光を収束して放つ”ビツカーチャージブレイク”という名の技が、リターンスズのメモリの効果で応用され、剣から放たれる遠距離斬撃へと変わる。

飛び道具として飛んで行った四色の光が、ジョーカーを飲み込む――

「させつかー！」

――かに、見えた。

しかしそこで自分の担当の敵を一発殴って離脱してきた玖珂光太郎が、翔太郎を庇う。

彼の青い拳は正義の体現。

悪の振るう斬撃で、それを貫ける道理はない。

「んぎぎぎぎぎぎ……！ 悪党の勝利なんて、誰も望んでねえんだよ……！」

「ほう」

しかし両手でサイクロンアクセルエクストリームの斬撃を挟み止めていた光太郎は、斬撃の重さに身動きも取れない状態だった。

それを見たアインは仮面の下でひっと笑い、空いた左手でエンジンブレードを投げる。

アクセルの剣は一直線に飛び、光太郎の右肩に突き刺さった。
「ぐあああつー！」

そして光太郎にある程度受け止められたとはいえ、多大な威力を持った四色の光の斬撃が、翔太郎と光太郎に直撃する。

攻撃の余波で土煙が舞い上がったが、土煙が晴れた後には、苦悶の声を漏らしながら悶える、倒れたままの二人の姿があつた。

「翔太郎さん！ 光太郎君！」

戦いを物陰から見守っていた雪絵が、悲痛な声を上げる。

翔太郎と光太郎が弱いのではない。

オーマ・ドーパントを一方的に、圧倒的に叩きのめしていたこの二人が弱いわけがない。

ただ、リターンズ・ドーパントが『再来』させた、『仮面ライダー^{ダブル}W』が強かった。
「これが、風都を丸ごとガイアメモリとした力だ」

寄り添うツヴァイに視線をやり、おぞましくにひつと笑ってから、アインは含み笑いする。

地球人類を苦しめてから皆殺しにする計画の開始に、王手をかけながら。

Kの者達／絆の相棒

ジョーカーの変身は解除され、光太郎は肩から大量の血を流している。

サイクロンアクセルエクストリーム

C A X になっっているリターンズ・ドーパント、絶技と呼ばれる超常の力を使うスカル・ドーパント、三体のオーマ・ドーパントもまだ健在だ。

体を隠している雪絵は、当然戦力にならない。

絶体絶命の状況だった。

「……世界は……」

しかし、玖珂光太郎は立ち上がる。

「コータローっ……!」

「世界の明日は、悪党が決めていいもんじゃない……!」

光太郎は肩に空いた大穴を抑え、ダメージで動けなくなっている翔太郎を庇うように立つ。

そして微塵も悪に屈していない心の状態を滲ませながら、アインに問いかける。

「なんでこんなことをしようとするんだ、この野郎!」

アインは翔太郎を、泥の中に見つけた宝石を見るような目で見ながら、静かに語り始

める。

「復讐だ」

「……復讐？」

「俺は元ガイアメモリ適合研究用被験体。

こつちのツヴァイは、NEVER試用被験体。そう言えば、分かるか？」

「！」

「名前もそれっぽいだろう。……俺達には、この名前しかないからな」

財団Xは、様々な研究機関や悪の組織に資金援助を行い、その見返りに資金援助を行った組織の技術の一部を吸収している財団だ。

そして吸収した技術を自分達なりに確立するために、当然のように人体実験も行っている。

ここ風都にあった悪の組織ミュージアムの、ガイアメモリ技術もそう。

死亡確定固体復環術NECRO-OVER……略してNEVERもそうだ。

アインは、ガイアメモリに適合させるために、体を玩具のように弄くられた人間。

ツヴァイは、死体を生き返らせ不死身の兵士にするため、危険な施術を繰り返された人間。

この二人は人間の悪意を受け、人間の悪意に傷めつけられた人間である。

ゆえに人間と、人間が生きる世界を憎んでいた。

「地獄だった……苦しくて、痛くて、辛くて……」

何度世界を滅ぼそうと思ったことか。

何度全ての人間を滅ぼしてやると憎んだことか。

その夢が、願いが、祈りが、望みが、ようやく形になる時が来た」

この世界の人類の悪意が、この世界の人類を滅ぼすかもしれない者を生み出してしまった。

「俺は度重なる実験で、リターンズのメモリ以外とは適合できなくなった……」

だが、ツヴァイは！

こいつに至っては、実験のためだけに殺され！

未完成のNERCRO—OVER技術のせいで、人間性の全てを一瞬で失ってしまったのだ！」

「！」

アインとツヴァイは研究所で兄妹と呼ばれていた。

血が繋がっているからではない。

アインより前の番号の被験体が100人ほど死んでいて、ツヴァイより後の番号の被験体も100人程死んでいて、番号が並んでいたこの二人を、研究員達がなんとなくて

そう呼び始めたからだ。

二人は兄妹ではない。

血の繋がった実の兄妹よりも強く繋がっている。

研究所で流れた血が、この二人を強く結んでいるからだ。

ツヴァイがまだ人間性を持っていた頃、長い時を共に過ごした二人の間にあつた絆は、兄妹のそれではなく、男女のそれで――

「これは復讐だ！ 俺達から全てを奪つた！ 俺からこいつを奪つた、世界への！」

アインは傍らに居たツヴァイを優しく抱き寄せ、悲痛に叫ぶ。

彼女は何の反応も示さない。何の感情も顔に浮かべない。

その時だけは、悪そのものであつたアインの語調に、ほんの少し悲しみが感じられた。「お前達にだつて分かるだろう！ 記憶があろうとなかろうと！」

半身でも！ 兄でも！ 式神でも！ 『相棒』を失つた悲しみは、同じであるはずだ！

「――っ」

そして、その言葉は、悪党の言葉であるというのに、翔太郎達の胸に突き刺さる。

「普通に生きる権利を持つていたというだけで、許されない罪だ！ 死ぬべき重罪だ！」

「生きてるだけで罪になることなんて、あるわけねえだろっ！」

「罪になる！ なるのだ！ 俺達が数えたお前達の罪を、俺達が忘れることはない！」
アインが叫び、光太郎が叫び、アインが叫ぶ。

罪を数えない人間には、誰かが「罪を数えろ」という必要がある。
未熟な若造が男になるためには、自分の罪を数える必要がある。

アインは、今この世界に生きている人間の罪を数え、それを突き付けていた。

たとえそれが、この世界の人間の大半にとって理不尽な罪の宣告であったとしても。

「苦しかった昨日を理由に、関係のない人の明日を奪うんじやねえ！」

「俺にとっては！ 関係のない人間など、憎くない人間など、この世界のどこにも居ない！」

「ぐ、づ、ぐあぁっ！」

サイクロンアクセルエクストリームが、エンジンのメモリで剣先から衝撃波を放つ。

光太郎はそれを受け止めるも、右肩に穴が開いている状態で受け止めきれはるはずもない。

血だるまになりながらゴロゴロと転がり、光太郎は翔太郎の隣に並べられてしまった。

「……まだ、やれるかい、仮面ライダージョーカー……！」

「……お前と同じくらいにはな、コータロー……！」

男二人は減らず口を叩くが、動いているのは口だけだ。

死にかけのイモムシのように、地を這いずることしかできていない。

「死ぬがいい、仮面ライダー。そしてこの世界の人間も全て、滅びるがいい！」

剣を振り上げ、複数のメモリの力をそこに込めるサイクロンアクセルエクストリーム。

次の一撃でジョーカーは蒸発し、アインはセプテントリオンから戦力の支援を受け、この世界を地獄と化すだろう。

もはやそれを止めるだけの力は、翔太郎の中にも光太郎の中にも残っていなかった。

（もう、ダメなのか……！）

詰み。

終わり。

負け。

手立てなし。

滅亡。

現状を表すネガティブな言葉が、翔太郎の脳裏に浮かんでは消える。

だが、何もかもが終わりかけた……その瞬間。

「左いつ！」

この街を守るもう一人の仮面ライダー、アクセルが颯爽と推参した。

「何!？」

アクセルはその身をバイクの形状にして突撃。

更には支援車両リボルギャリー&ガンナーAも同時に突撃させ、戦場をしつちやかめつちやかにかき回していた。

自分で何かを考えることが出来ないツヴァイ、遠方から見守っているだけだったオーマ・ドールパント達は、この展開に有効な対応を行うことができなかつた。

アクセルの変身者、照井竜は本来ならばここでアインに立ち向かう人間である。

だが問題は、時間経過で死にかねない光太郎と翔太郎の二人だった。

怪我人を放つて戦うわけにはいかない。

そのため、照井は最初^{アクセル}に攪乱の一手を打ち、仲間を回収してすぐさま逃走するという作戦を立て、実行に移していた。

ガンナーAが玖珂光太郎を拾う。

照井がバイク形態を維持したまま、左翔太郎を拾う。

そして最後にリボルギャリーが雪絵を回収し、全員揃って逃走する……はずだった。

「おっと、そうは問屋が卸さない」

にひっ、とおぞましく笑い、アインがヒートトリガーエクストリームに姿を変える。

遠距離火力だけならばサイクロンアクセルエクストリームを超える、火力特化形態が銃を持ち、銃口が派手に火を吹いた。

リボルギャリーはその一撃で吹っ飛ばされ、引っくり返されてしまう。

「あつ」

ガンナーAは光太郎を拾った。

照井は翔太郎を拾った。

結果、引っくり返ったりリボルギャリーと、須藤雪絵だけが残される形となる。

「ぐ……照井！ 雪絵さんの方に」

「ああ、行くぞー！」

翔太郎は肉も、骨も、内臓も傷んでいる体で。体力も、気力も、血も足りていない体で。バイクになった照井に跨がりながら、雪絵に向かって手を伸ばす。

迫って来る照井と翔太郎を見て、雪絵も同じく手を伸ばした。

「雪絵さん！」

「しよた——」

なのに。

フ・ア・ン・グ・ジ・ョ・ー・カ・ー・エ・ク・ス・ト・リ・ームの跳躍力で、アインは二人の間に割って入る。

「今のお前の気持ちだが、俺があゝの頃常感じていた気持ちだ、左翔太郎。名を、絶望と言
う」

翔太郎の手を掴もうとした雪絵の腕は、アインに捻じり上げられる。

「痛っ!」

「雪絵さんッ!」

照井はそれを見て、ブレーキではなく、アクセルを吹かす。

すれ違いざまに翔太郎が雪絵を抱きかかえてそのまま逃げる予定だった。

けれどもアインの妨害の結果、照井はハンドルを切りつつアクセルを吹かし、すれ違
うように須藤雪絵から離れていく形となった。

「戻れ照井!」

「ダメだ、間に合わない!」

「あの人は! 俺の依頼人なんだよ!」

「……っ!」

『依頼人は絶対に守る。』

左翔太郎のその信念を知っているがために、照井は仮面の奥で強く歯を噛み締める。

アインはそんな翔太郎達を嘲笑うように、含み笑い一つ。

そして、複数の形態を流動的に切り替えながら、盾から光線を、銃から火力を放ち、爆撃のごとく翔太郎達を攻め立て始めた。

「っー！」

照井が逃げの一手を選んだのは、正解だった。

もしもどこかで、逃げ以外の手を考えていたならば……ここで、リターンズ・ドーナツの攻撃に間違いなく飲み込まれていただろう。

そしてアインの火力だけでなく、ここでツヴァイまでもが絶技の火力を叩き込んでくる。

「光輝背負うもの 秩序と法の王

聖なる峰の頂に座す至高の王 ハーン・ハン

秩序の軍団員 法の執行者 光おびしもの

白にして白骨の我は要請し 根源の光もて敵を撃つ

完成せよ 『地から伸びる光の牙』

メモリに依存しない力による、極太のビームまでもが戦場に乱立した。

照井に運ばれながらも、翔太郎は依頼人の名を叫び続ける。

「雪絵さああああああんっ!!」

その内、ダメージのあまりの大きさに、翔太郎は気絶してしまった。

逃げ去つていく翔太郎達の背中を見ながら、アインは銃口を下ろす。

まだ翔太郎達はアインの攻撃範囲の中に居る。なのに、直前まで苛烈に攻めておきながら、アインは彼らの逃走を見逃していた。

赤いオーマ・ドーパントが現れ、そんなアインに話しかける。

「追撃しますか？」

「無理をする必要はない。あの類の人種の行動は、とても分かりやすいものだ。

……玖珂光太郎、須藤雪絵。

予想外のイレギュラーの情報を短時間で集めてきたお前の手際、助かったぞ」

「はっ」

アインは躊躇なく、かつ殺さない程度に手加減して殴り、雪絵を気絶させる。

そして気絶させた雪絵を、赤いドーパントに手渡した。

「この女を連れて行け。丁重に」

「……ああ、なるほど」

「この女が我々の手の中にある限り、奴らは来る。必ずな」

赤いドーパントは雪絵を抱え、歩き始めたアインの後に続いていく。

黒のオーマ・ドーパント、黄のオーマ・ドーパント、無言のツヴァイもその後が続く。
「さて」

アインは手の中の『リターンズ・メモリ再来の記憶』と、雪絵を見て、面白そうに呟く。

「リターンズメモリの力で、この女が持っていた兄の喪失の記憶が蘇れば、どうなると思
う？」

仮面ライダーとの決戦を彩るスパイスを、彼は見つけたようだ。

どうなるか分からないが面白そうだ、と思いながら、彼は手の中でメモリを転がした。

真っ白な空間。

ひと目で夢の中だと分かるような、そんな空間。

翔太郎はそこで、どこかに歩み去っていく園咲霧彦の背中を見た。

叫ぶ翔太郎。

「霧彦！　なんでだ！

なんで雪絵さんに、困った事があれば鳴海探偵事務所に行け、なんて言ったんだ！」園咲霧彦は、死の直前に妹である須藤雪絵に電話し、何かあれば鳴海探偵事務所に行けという言葉——事実上の遺言を——遺した。

鳴海探偵事務所において、霧彦と交流があつたのは左翔太郎ただ一人。

ならば、その言葉の意味はおのずと察せるといふものだ。

それは血の繋がった妹を、愛する家族を託す行為。

生半可な信用で行えることではない。

翔太郎には分からなかつた。

霧彦が何故、そこまで自分を信じてくれたのか。

夢の中の霧彦は、翔太郎に背を向けたまま手を軽く振り、一言だけ、言葉を紡ぐ。

「お前が、私と同じ街を愛した男だからだ」

翔太郎は霧彦を、霧彦は翔太郎を信じていた。それはきつと、今も——

そうして、翔太郎は目を覚ました。

「霧彦っ！」

目覚めてすぐに状況確認。翔太郎は自分がベンチに寝かされていたこと、自分の怪我

の手当てがされていたこと、ここが公園であること、そして近くに虫の息の照井が居ることに気がついた。

「……起きたか、左」

「照井……っってお前、その怪我は!？」

「ふざけた火力だ……見逃されたのだと思うと、尚更に苛立つ」

照井竜は、翔太郎と光太郎を連れて逃げる過程で、リターンズ・ドーパントの火力により重傷を負わされていた。

照井は光太郎と翔太郎の傷の手当てをし、自分の怪我の手当てもしたのだろうが、彼の傷はおそらく翔太郎以上に重く深い。

動くこともできなくなっていた二人を助けるため、どれだけ無理をしたのかが伺える。

「すまねえ、照井……助けられちゃったな」

「左」

倒すべき敵に負け、依頼人を奪われ、仲間に使われた翔太郎の雰囲気は暗い。

あるいは、半年前までのフィリップが居た頃の翔太郎ならば、こういうことがあっても平常運転で前に進めていたかもしれない。

けれど今の翔太郎は、そう在っていなかった。

そんな翔太郎に照井は詰め寄り、その胸ぐらを掴み上げる。
「もう少しししゃんとしろ」

「照井？」

仮面ライダーアクセルは、仮面ライダーWダブルとも、仮面ライダージョーカーとも、共闘したことがある仮面ライダーだ。

そんな彼だからこそ、言えることがある。

「本来のお前なら、もう少しマシな流れになつていたはずだ」

「何を……」

フィリップを知り、”左翔太郎の流儀”に敬意を払う照井だからこそ、フィリップを無くした後の翔太郎に言えることがある。

「アクセルとジョーカーなら、アクセルの方が強い。」

だがフィリップは、風都の未来をお前に託した。

照井竜ではなく、左翔太郎に託したんだ。その意味が分かるか？」
胸ぐらを掴む手に、力が込められる。

”賭けるなら左翔太郎だ”と、フィリップが思ったからだ。……俺が、そう思っているように」

「――！」

その言葉に、翔太郎は目を見開いた。

照井は掴んでいた胸ぐらを離し、青い顔で翔太郎に携帯電話を見せる。

「刃野刑事から連絡が入った。

何かトラブルがあつたらしい。

俺はここで一旦抜けるが……ここを動かすなよ。

そして俺が戻つて来るまでの間に、色々と考えておけ」

去つていく照井の背中を見送り、翔太郎はベンチに背を預けて空を見上げる。

「……」

思い出すのは、アインという男が叫んだ言葉。

—— 半身でも！ 兄でも！ 式神でも！ 『相棒』を失った悲しみは、同じであるはずだ！

ずだ！

あの言葉を聞いた時、翔太郎はほんの少しだけ、アインに同情してしまったのだ。

相棒を失い、その分まで街を守ろうと誓ったのが左翔太郎。

相棒を失い、その分まで人に復讐すると誓ったのがアイン。

そんなアインが、憎しみのWダブルとなつてこの風都で暴れている。

なんと皮肉なことか。

(またお前に、ハーフボイルドだつて笑われちまいそうだぜ、フィリップ……)

今の翔太郎の内には、拭い去れない迷いがある。

こういうところが、敵を悪党と断じて迷いなく叩きのめすことが時にできなくなるところが、左翔太郎のハーフボイルドたるゆえんだ。

善と悪の境界線がはつきりとしていて、格好良くかつ迷わない光太郎とは対照的。

人によつては甘すぎる、と言う。

人によつてはそれがいいんだ、と言う。

空を見上げる翔太郎に、彼とは対照的に何も迷っていない者が、声をかけた。

「なーにしょげてんだ？」

「ー」

「見回り終了。周囲に敵の姿なし。……って、あの刑事さんどこ行つたんだ」

包帯で包まれた光太郎が、この場所には現状危険がないことを告げる。

包帯に包まれているのは翔太郎も同じだが、肩に穴が空いている光太郎は翔太郎より重傷で、なのに翔太郎より光太郎の方が元氣に見えた。

心の在り方の問題だろうか？

ふと翔太郎はあの時、アインが光太郎を見て言っていた『式神』という言葉思い出し、それを光太郎に聞いてみた。

「なあコータロー、あいつが言つてた、式神って……」

「……ザサエさんのこと、かな」

光太郎は少し悲しそうに、けれど笑って、”今はもう居ない”相棒のことを語り始める。

「ザサエさんは俺の式神で、俺の相棒だったんだ。

俺と一緒に、俺の街を守ってた。

なんだけど……俺の仲間と融合して、俺の仲間の命を助けてくれたんだ。

あの時はよく分かってなかったけど……今なら分かる。俺の相棒は、もう居ないんだって」

「！……俺の、俺の相棒も、この街を守るために……」

「……ジョーカーとは、初めて会った時から他人の気がしなかったんだよな」

「……俺もだ」

二人の境遇は、とてもよく似ている。無くした相棒を、今も思い続けているところも。

「俺達は街を守るため、相棒と一緒に戦って、相棒を失った探偵。

……違うとすりや、被害の大きさか。

こっちは最初の城の時だって、6万人以上死んでた。二回目も、そんぐらいかな」

「コータロー……」

「お前は、仮面ライダーは、すげーと思う」

光太郎は敵の襲撃に備え周囲を見回っていた時、夕日に照らされるこの街を見て、この街における悪をぶつとばす青年探偵が、どれほど多くのものを守ったのか認識したのだろう。

そして自分の時の戦いで何人死んだか、少し比較してしまったのだろう。

光太郎が翔太郎に向ける声に、少し敬意が混じったように聞こえるのは、気のせいではない。

「凄くなんかねえ。俺は、ハードボイルド気取りのハーフボイルドだ……」

しかし光太郎から敬意を向けられている翔太郎はといえば、アインの境遇に同情してしまう気持ちから生まれた迷いからか、少し情けない姿を晒していた。

「コータローの方が凄えさ。」

相棒を失つてもしっかり立ってやがる。

俺はフィリップが居なくなつてから、ずっと、やせ我慢したまんまだ……」

「……」

「なあ、なんで、そんな風に強く立ってられるんだ……？」

光太郎が翔太郎に向ける敬意があるように。

翔太郎が光太郎に向ける敬意もある。

相棒を失ってなお、凜と立つ青年探偵に、翔太郎は心の底からの疑問を叩きつけていた。

「俺は仲間を信じた。」

けど、ザサエさんに教えられたんだ。

今は居ない相棒に、教えられたんだ。仲間を信じることと同じくらい、大事なものを」

光太郎はドン、と胸に拳を叩きつける。

翔太郎はその時、変身しないと見えないはずの拳の青光が、見えた気がした。

「誰かに信じられる前に、誰かを信じる前に。」

信じられた自分で在り続けなくちゃならないってことを」

「……」

「俺はザサエさんに信じられた自分で在り続ける、

ザサエさん相棒は、俺が俺らしく在ることを、きつと望んでくれると思うから」

光太郎の相棒・ザサエは、光太郎にこう在れと口にしたことはない。

だが相棒というものは、言葉ではなく心で繋がるものだ。

ザサエは光太郎を信じた。

信じた光太郎のその在り方が、ずっと続いていくことを望んでいた。

相棒が信じてくれた過去が。

相棒が信じてくれた自分が。

今もなお、玖珂光太郎を強く立たせ、強く輝かせている。

「難しいこと考えなくていいんじゃないか？」

俺も、お前も、相棒が信じてくれた自分を、相棒が肯定してくれた自分を、貫きやい
い」

「コータロー……」

「いい男は過去を忘れないけど、振り返らないんだそうだぜ。仮面ライダー」

光太郎の言葉が、翔太郎の心の中に、忘れかけていた『大切な言葉』を想起させる。

——だから Nobody's Perfect だつてば

「完璧な人間など居ない……互いに支え合つて生きていくのが、人生というゲーム……」

「なんだそれ？」

「Nobody's Perfect
誰も完全じゃない……」

俺の探偵の師匠が……それを覚えてた俺の相棒が、俺に言ってくれた言葉だ」

一人で頑張らなければと考え、やせ我慢をしていた翔太郎。

心のどこかで、照井の力を借りることにすら後ろめたさを感じていた翔太郎。

頑なになり、本来の良さを発揮しきれていなかった翔太郎。

その心が、ほんの僅かに氷解する。

「俺達は未熟かもしれない。未完成かもしれない。」

「ハーフボイルドかもしれない。だけど、一人じゃない」

光太郎がそう言えば。

「……だな。今は、俺達がチームだ」

翔太郎はそう返す。

「!? おい!」

「分かってる……なんだあれ、黒いフアングメモリ……なのか!」

そして、翔太郎の心の変化が、あるメモリを引き寄せる。

エクストリームメモリやフアングメモリが、人を見て勝手に判断し、人に手を貸す時の行動と同じように。その『黒いフアングメモリ』は、翔太郎の前に姿を表した。

黒いフアングメモリは翔太郎と光太郎の前で、立体映像を映し出す。

『私のメッセンジャーメモリが起動したということは、よつぼどの事態のようね。左翔太郎』

「シユラウド!」

その立体映像の女性に、翔太郎は腰を抜かすほど驚いた。

アインは仮面ライダージョーカーとの決戦の場に、空き地を選んでいた。

偶然だが、その空き地はユートピア・ドーパントと仮面ライダーWが最後の戦いを行い、フィリッツプが消えた場所だった。

「ツヴァイ」

そこでアインはオーマ・ドーパント達を控えさせながら、ツヴァイの頭を撫でていた。ツヴァイは何の反応も返さない。まるで人形のように。

「待っている……もう少し、もう少しで俺が……」

最大限に苦しめて殺しながら、この世界の人間全ての人間性を剥奪してやる……

やつらを研究材料として扱い、家畜のように扱ってやる……

俺達が、そうやって人間性を否定されたように……だから、もう少しだけ待っていてくれ」

『失われた相棒』を見つめながら、アインは悲しげな顔で物騒な言葉を口にする。

「お前を世界で二番目に人間性のある、世界で一番不幸じゃない人間にしてやるから

……」

「アインが漏らした”本音”の一部分、”全ての人間をツヴァイ以下の人間にする”という言葉に、この場で唯一アインの味方でない人間が揶揄するような言葉をぶつける。」「哀れね」

アインはその言葉に反応し、ゆっくりと振り返る。

そこには気絶していたはずの須藤雪絵が、縛られた状態でアインを睨みつけていた。気絶する前と後で、纏っている雰囲気がるで違う。

「……開口一番それか。俺は、記憶を取り戻してやった恩人だぞ?」

「この街を愛する男の敵は、私の敵よ」

須藤雪絵は、リターンズのメモリの効果で、全ての記憶を取り戻していた。

全ての記憶を取り戻した彼女は、アインを”救いがない人間”と罵倒するのではなく、”哀れ”と言って同情していた。

「あなたは哀れよ。」

どんなに戻りたいと願っても、過去きのうにあなたは戻れない。

無くなってしまった過去きのうの日々は、もう戻って来ない。

あなたははじめに過去きのうにすがりついているだけよ。

何故ならあなたは、”愛する人を踏み躪られたからこそ”、人を憎んでいるのだから」

「……兄の復讐に走った女が、よく言う」

「確かに、私の復讐相手はもう居らず、私の復讐ももう終わっている。

だけど私の復讐が終わったのは、復讐相手がいなくなっただけからじゃない。

私が、仮面ライダーと……左翔太郎と会って、変えられたからよ」

(……！)

アインは復讐鬼だが、雪絵は復讐鬼”だった”女だ。

「復讐で心は晴らせない。

復讐で過去は変えられない。

復讐で人は守れない。

復讐で後悔は乗り越えられない。

呪われた過去を振り切れない奴に、光は無いのよ……私がそうであったように」

暗い重みのある言葉に、アインはおぞましく笑って返答を返す。

「光など求めた覚えはない。

ただ、全ての人間が、俺とツヴァイより暗い場所に行けばいい」

「ならあなたは、きつと仮面ライダーには勝てないわ」

「何？」

そんなアインに、雪絵はふつと笑って微笑みかける。

「私は変えられてしまった。

もしもう一度あの人に会えたなら、私はこう言おうと思つてゐる。

『“きのう”はみつかった』と。

『思い出せた兄との思い出はもうこの胸の中にある』と。

『ありがとう』と。

……復讐鬼だった私が、こんな簡単に変えられてしまったのよ。笑つちやうわね」

翔太郎を信じきっている雪絵の様子に、微塵も揺らがぬその余裕に、アインは怪訝な顔をする。

「左翔太郎は十分に傷めつけた。もう俺に勝てる体の状態ではない」

「それでも、賭けるとするなら、私はあの人に賭けるわ」

ずっと前に、鳴海荘吉がそうしたように。

半年以前に、フィリップがそうしたように。

ついさつき、照井竜がそうしたように。

須藤雪絵は、左翔太郎に賭ける。

「悪では彼には勝てない。

憎しみでは彼には勝てない。

一度叩きのめしたところで、必ず立ち上がり、最後には必ず勝利する……」

縛られた状態で、左翔太郎への人質に取られた状態で、それでも雪絵は堂々としてい

る。

堂々と生き、堂々と死んで行った兄のように。

「だからこそその切り札ジョーカーなのよ」

そして遠方より、バイクの音が聞こえ始めた。

黒いフアングメモリに映し出された立体映像のシユラウド——翔太郎の相棒フィリップの母——は、感情を出さないようにした話し方で、翔太郎に話しかける。

『これは記録されていた映像よ。』

左翔太郎。あなたの返答を予想し、計算し、事前に声と映像を吹き込んだもの。

普通に話さない。ビデオに話しかけるようなものだけれど、会話は成り立つはずよ』

「シユラウドオ！ それはバカな俺の返答なんぞ予想は簡単だって意味があっ!？」

『バカにするつもりはないわ。あなたはそれでいいのよ。』

その単純さと、ハーフボイルドさこそ、あなたの持ち味。

あなたの行動や言動は予想しやすけれど、あなたはそこから必ず予想を超えた結果を出す』

「…………お、おお」

光太郎はシユラウドの思惑の邪魔をしないよう、押し黙る。

翔太郎はシユラウドから割とストレートに褒められたからか、露骨に照れていた。

『これは、フアングメモリを模したメツセンサーメモリ。』

私が生きていようが生きていまいが、危機には必ずあなたの目につくはずよ。

このメモリの中には、T2ガイアメモリの試作品の改良型にあたるメモリが三つ入っている』

カシユン、と黒いフアングメモリが形を変える。

するとその機体の中から、T2ガイアメモリと呼ばれる特殊なガイアメモリのラインナップの中にあつた三つのメモリと同じ形で、同じ記憶を宿したメモリが現れた。

「このメモリは……………」

『どれも強度的に問題があり、安全面を考えて使い捨ての仕様にしてあるわ。』

使えるのは一度だけ。使う場所はちゃんと考えて、あなたの判断で使いなさい』

「一度だけ……………」

翔太郎がそのメモリを手に取ると、黒いフアングメモリの体にヒビが入り始め、立体映像のシユラウドの姿がブレ始める。

『忘れないで、左翔太郎。来人が居ない今、あなたこそが街を守る唯一の切り札』

「シユラウド……」

そうして黒いフアングメモリは自壊し、立体映像は消え、シユラウドの言葉だけが響いた。

『たった一枚でも勝負を賭けられる。だからこそその切り札ジョーカーなのよ』

翔太郎は右手にジョーカーのメモリを。

左手にシユラウドから託された想いのメモリを。

それぞれ握り締め、強く歯を噛み締めた。

準備運動をしている光太郎の視線を受け、愛用バイク・ハードボイルダーのエンジンを始動させながら、翔太郎はかかってきた電話に出る。

「照井か。どうした？」

『街中にドーパントが現れた。話に聞くオーマ・ドーパント……それも十数体だ』

「！」

『どこからかアインとやらが指揮しているようだが、こちらは対応で手一杯だ。

左、こちらのドーパントは任せろ。お前はこのドーパント達の頭、主犯のアインを狙え』

「……照井、大丈夫なのか？」

お前怪我してるじゃねえか。その上、十数体のドーパントなんて……」

『俺に質問をしている暇があるなら、さっさと片付けてこい。』

『この有象無象を俺が全て叩きのめし、振り切り、お前を助けに行く前にな』

「！ へっ、生意気言いやがって。」

お前の助けなんか要らねえっての！ こっちはこっちで勝つ！」

『死ぬなよ左。俺は勿論、死なん』

少し笑って、照井からの電話を切る翔太郎。

翔太郎はそのままバイクに跨がり、その後ろに乗った光太郎が、ニカツと笑って翔太郎に話しかけた。

「みんなお前を信じて、お前に全部BETしてるな」

「ああ、なら、負けられねえよなあ……俺は、仮面ライダーなんだ」

そして、バイクを発進させた。

敵の位置は光太郎の勘が教えてくれる。

厳密には、光太郎の勤に嘯リユウいている精霊が教えてくれる。

「なあコータロー、なんでお前は俺のことをずつとジョーカーって呼んでるんだ？」

「だってそれが、街を守る時のあんたの名前だろ？」

「……ああ、そうだよ！ そうだな！ そうだった！」

何故こんなにも、玖珂光太郎の言葉は胸に響くのか。翔太郎は少し、不思議に思う。

本質をごく自然に見抜き、どこまでもまっすぐに生きている光太郎の言葉は、周囲の人間をちよつとづつ、ほんのちよつとづつ、良い意味でバカにするのだ。

人助けに全力で奔走するような、本物のバカに。

(見えた！)

翔太郎と光太郎は、ほどなくして敵が待ち受ける空き地に辿り着く。

そこがユートピア・ドーパントとの決戦の地であり、相棒フィリップとの別れの地であるということ、翔太郎だけが知っていた。

学ランの位置を直す光太郎。帽子の位置を直す翔太郎。顔をあげるアイン。

「来たか、仮面ライダー。そして、玖珂光太郎」

三体のオーマ・ドーパントに守られているツヴァイト、その四人から少し離れた位置に居るアイン、彼らの背後で縛られ猿轡を嘯リユウまされた雪絵。

ツヴァイトは豊満な胸の谷間に、アインは眉間にメモリを突き刺し、その姿を変える。

されど、翔太郎も光太郎も全く気後れした様子が見て取れない。

「まず最初は」

「ああ、分かっているさ」

二人は目を合わせるだけで、完璧な意思疎通を行っていた。

「俺の名前は左翔太郎」

「俺の名前は玖珂光太郎」

「悪をぶつとばす青年探偵！」

そして、名乗りを上げる。翔太郎は左手を、光太郎は右手を、銃のようにして敵へと向けて。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

正義の味方に、相応しい名乗りを。

「ツヴァイから罪を数える権利と！ 人間性を奪ったこの世界を！ 俺は許すものかっ！」

アインが叫び、光太郎はアインから離れたツヴァイとオーマ・ドーパント達を見て、アイン以外の怪物達を引き付けるように動く。

この展開を予想していたのか、あるいはこの展開にしたかったのか、ツヴァイ達はその誘いに乗り光太郎相手に多対一を仕掛けた。

「こつちは任せろ、ジョーカー！」

「ああ、任せた、コータロー！」

翔太郎から離れた光太郎は、翔太郎から離れた所で、四体のドーパントに囲まれる。

スカル・ドーパントが一体。オーマ・ドーパントが三体。

その内の一人、赤色のドーパントが光太郎に話しかけた。

「愚かな。自殺志願者か……」

そんなことを言い出す敵に、玖珂光太郎は不敵に笑い、こうのたまう。

「進んで怪我したいとは思わねえが……」

保身よりも優先することはある！ 例えばそれは正義ってやつだ！」

光太郎が拳を振るい、大きな声を響かせる。

「四人まとめてお縄にしてやる！ 覚悟しやがれこの悪党！」

空振ったはずのその拳が、世界を殴って揺らしたかのような錯覚が、オーマ・ドーパント達の中に生まれていた。

アインは仮面ライダージョーカーを倒して初めて、セブテントリオンに認められる。彼にとって、左翔太郎は容易に倒せる一目標でしかない。

……なのに、何故。

アインは翔太郎を見ると、こんなにも苛立ってしまったのだろうか。

「いいからさっさと死んでくれ、仮面ライダー……！」

「よっぽど俺に死んで欲しいみたいだな、お前」

「ああ、死んで欲しいな。心の底から」

翔太郎はアインの殺意をその身に受けながら、強く正しい立ち姿でメモリに触れる。

《 JOKER! 》

「俺もいつかは死ぬ。」

フィリップも死んだ。

けど、俺はフィリップと地獄の底まであいつと相乗りすると決めた。

だからまだ死んでないだけで、俺はまだあいつと相乗りしている……！」

「それがどうした、仮面ライダー！」

「変身」

《 JOKER! 》

翔太郎の姿がジョーカーのそれに変わり、問答無用でサイクロンアクセルエクストリームに変身したリターンズ・ドーパントが、エンジンブレードを振り上げる。

「俺は俺だ！ フィリップに信じられた俺で在り続ける！」

「ならば相棒と一緒に地獄でも行くがいい！ 地獄にまで相乗りしているー！」
 そうして、アインは渾身の剣を振り下ろし。

翔太郎は、シユラウドから受け取ったメモリの一つを、右腰のマキシマムドライブスロットに挿し込んだ。

《XTREME!》

新たな力が。エクストリーム 極限の力が、ジョーカー 切り札の記憶を呼び覚ます。

エンジンブレードは、翔太郎の右腕に掴み止められていた。

「なっ……いっ！」

シユラウドの『試作型エクストリームメモリ』……T2ガイアメモリのエクストリームメモリと同じ、USB型のメモリ。それは砕けると引き換えに、ジョーカーに新たな力をもたらした。

装甲の細部はより鋭角に、頭部アンテナもより雄々しく、装甲に引かれる色のラインも多々に。

黒色の装甲に映える紫色のラインは、よりくつきりと。

そしてそれ以上に目につくのは、仮面ライダージョーカーの首にてはためく、風色 緑色の

長いマフラー。

「仮面ライダー ジョーカー Ver. エクストリーム X」

ジョーカーメモリだけをエクストリームメモリの力で強化した、一回きりの強化形態。

「雪絵さんに……この街の人間に手を出したな。絶対に、許さねえ！」

！
お前がどんなに強くても、風都を泣かせる奴は、体一つになっても食らいついて倒す

それが、その心そのものが……俺がファイリッブに誓った、仮面ライダーの在り方だ！
この街そのものの切り札となる仮面ライダーが、アインの前に立ち塞がっていた。

Kの者達／この街に正義の花束を

夕日が沈む。

夜が来る。

昼と夜の境界の時間が終わる、その時間帯……憎しみのWとジョーカーは、海の上で戦っていた。

「ちよこまかと……!」

「それはこつちの台詞だ!」

憎しみのWは、サイクロンジョーカーゴールドエクストリームの体を一部再来させ—

——正確には、羽しか再来させられなかった——、空から爆撃に近い銃撃を放つ。

アインが狙うは、海上を走るエクストリームのジョーカー。

ジョーカーは専用バイク・ハードボイルダーの車体後部、換装可能なユニット部分をスプラッシュユニットに換装し、水上特化のハードスプラッシュヤーにした上でそれに跨つて、水の上をWに負けない速度で移動していた。

「タフでなければ生きて行けない。」

優しくなれなければ生きている資格がない。

だからこそそのダブルなんだよ！ 一人で戦うダブルなんざ……俺が、必ず打ち倒す
！」

「やれるものなら、やってみろ！」

水上をジグザクに走り、サイクロンアクセルエクストリームの攻撃を避ける翔太郎。

そんな翔太郎に向け、アインはエンジンブレードにヒートメモリを差し込み、数十m
というサイズの炎剣を発生させ、空の上から翔太郎を斬りつけた。

《HEAT! MAXIMUM DRIVE!》

蒸発していく海の水。

吹き上がる水蒸気。

生身であれば、肌を焼いていたであろう熱風。

飛び散る水滴の一つ一つが熱湯で、エクストリームのジョーカーの装甲がそれを弾い
ていく。

「もうただのジョーカーじゃないってことを、教えてやるぜ」

炎剣の乱舞を的確に回避しながら、翔太郎はトリガーメモリをマキシマムドライブス
ロットに挿し、マキシマムドライブを発動させた。

《TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!》

「ライダーシューティング！」

ジョーカーの手の中に現れるトリガーマグナム。引き金が引かれ、翔太郎の渾身の射撃が憎しみのWの眉間ダブルに刺さった。

「が……！」

卓越した射撃技術を持っていた鳴海荘吉を師と仰ぐも、翔太郎自身は生身での射撃を得意技としているわけではない。達人の域にはもう少しの時間と修練が必要だ。

なのに、サイクロンアクセルエクストリームの攻撃をかわしながらの精密射撃を命中させた。

何故当たったのか？ 気合である。

気合だ。

気合で当たったのだ。

(ここで調子付かせたくはないな……)

アインはプリズムソードにアクセルメモリ、エンジンブレードにルナメモリを挿入し、マキシマムドライブを発動。

《 ACCCEL! MAXIMUM DRIVE! 》

《 LUNA! MAXIMUM DRIVE! 》

突き出したプリズムソードから、赤い刃の先を無数に発射。

横に振ったエンジンブレードの刀身部分を延長する形で巨大化させ、海面を切り裂い

た。

翔太郎は時にハンドルを切り、時に急停止と急加速を繰り返し、時にはバイクの上で飛び跳ねる器用さを見せて回避する。

そして、海上から陸地へと向かった。

(逃がすものか)

Ver. エクストリーム Xのジョーカーは陸地に辿り着く直前、バイク・ハードボイルダーの上

から跳躍し、陸地の支援車両・ガンナーAに飛び移る。

そしてそのまま、陸地を爆走した。

やがて陸地を爆走するガンナーAの上から跳躍し、翔太郎はビルの壁面に着地する。

ビルの壁面を駆け上がるジョーカー。

空を飛び、ジョーカーに近接攻撃を仕掛けようとする憎しみのW。ダブル

ビルの壁面から跳躍し、アイン向かって一直線に飛ぶジョーカー。

飛行速度を加速させ、両の手の剣を振るう憎しみのW。ダブル

《 HEAT! MAXIMUM DRIVE! 》

《 CYCLONE! MAXIMUM DRIVE! 》

《 METAL! MAXIMUM DRIVE! 》

ジョーカーの右腰でヒートメモリが、プリズムソードでサイクロンメモリが、エンジ

ンブレードでメタルメモリがマキシマムドライブを発動させる。

「おおおおおおおおおっ!!」

「あああああああああああっ!!」

突き出されたジョーカーの拳を、アインはメタルメモリで防御力を上げたエンジンブレードで受け止める。そこから、プリズムソードより風の刃を飛ばした。

ジョーカーは空中で体をひねり、身のこなし一つで空中回転しそれを回避する。だがそこで、アインは気付く。

ジョーカーが発動させたのはヒートメモリのマキシマムドライブであったはずなのに、ジョーカーの手が燃えていない。

空中で回転したのは、回避だけでなく攻撃のためでもあった……そう気付いた時には既に、ジョーカーの燃えるキツクが、憎しみのWの顔面ダブルに叩き込まれていた。

「ライダーブランディング!」

「づ……!」

ゴールドエクストリームの翼を部分的に再来させているアインと違い、どこまでも跳んで跳ねるだけの翔太郎は、攻撃が終われば落ちていくだけ。

しかし、翔太郎は一人ではない。

落ちていく翔太郎を、空戦形態に換装したハードボイルダーが、空中で受け止めた。

「うしー！」

翔太郎のバイク・ハードボイルダーは、翔太郎が陸に上がったと同時に車体後部のユニット換装を始められ、戦いと平行して海戦用ユニットを空戦用ユニットに換装させられていた。

そして出撃・射出・飛翔し、飛べないジョーカーに空戦能力を付加。

空での第二ラウンドを開始した。

空戦形態・ハードタービュラーには、ビーム砲と振動刃が備わっている。

それを最大限に利用して、ジョーカーは憎しみのWとの空中戦を繰り広げた。

撃つ。かわす。放つ。弾く。切る。避ける。ぶつかる。受ける。

地より見上げればはるか上空で、展開される空中戦。

夜の星空を切り裂くように、メモリの輝きが闇を裂く。

ビームが流星のように夜空に線を引き、町の住民の一部が空を見上げていた。

風都がつい最近まで『ビルが溶け、人が死ぬ。この街ではよくあること』と言われて

いたような街でなければ、大騒ぎになっていたところだろう。

このくらいならば、この街では本当によくあることだ。

「仮面、ライダーッ！」

サイクロントリガーエクストリームとなったアインが、風の弾丸を連射する。

マシンガンが亀の歩みに見えるほどの高速連射に、翔太郎はサイクロンメモリを手にとった。

《CYCLONE! MAXIMUM DRIVE!》

「ライダーサイクロン!」

サイクロンメモリのマキシマムドライブが、緑の風を巻き起こす。

単純なエネルギー量では飛んで来る風の弾丸にも及ばないが、巻き起こされた風は風の弾丸を逸らし、翔太郎と空飛ぶバイクを風の弾丸から守った。

翔太郎はそのまま、風を纏ってバイクごと体当たりを仕掛ける。

「!」

迎撃しようとするアインだが、衝突の直前にバイクからジョーカーが跳躍したのを見て、一瞬対応に迷ってしまう。

一瞬の逡巡の後、アインは回避を選んだが、迎撃だろうと回避だろうと結果は変わらない。

バイクの突撃に対処したその一瞬の隙で、翔太郎はアインの背中に張り付いていた。

「っ、離せ!」

「離すかよ!」

狙うは羽。

羽に関節技を極め、折り目を入れてから打撃を叩き込み、脆くなったところに力を入れてもぎ取るといふ丁寧な攻撃で、ジョーカーは全ての羽をもぎ取っていった。

（こいつ、正気か……!?!）

当然、飛べないジョーカーと飛べなくなったWは、地上に落ちる。

「つうあつ!?!」

落ちた所は、戦いが始まった空き地の近くだった。

リターンズ・ドーパントと、ジョーカーVer. エクストリーム Xは、その耐久力の差からか前

者の方が先に立ち上がり、駆ける。

ジョーカーも僅かに遅れて立ち上がり、敵の攻撃をジョーカーが迎え撃つ形になっ

た。

《PRISM! MAXIMUM DRIVE!》

《LUNA! MAXIMUM DRIVE!》

Wの振り上げたプリズムソードで、プリズムメモリが。

ジョーカーの右腰で、ルナメモリが。

それぞれマキシマムドライブを発動し、攻撃側のWの手により、必殺の斬撃が振るわ

れる。

「!?!」

”プリズムブレイク”とも呼ばれるその斬撃は、ジョーカーの胸に突き刺さる。だがアインが勝利を確信したその瞬間、突き刺したはずのジョーカーの体が掻き消えた。

「ライダーリニュージョン。そいつは幻術だ」

「！」

自分の幻影を一つ生み出し、本体の姿を消すマキシマムドライブの効力時間が切れ、ジョーカーの姿が現れる。

そしてジョーカーは、^{ダブル}Wの顔面に向けて強烈な回し蹴りを放った。

^{ダブル}Wはその回し蹴りを両腕でガードし、ジョーカーにカウンターのローキック。

ジョーカーはローキックを丁寧にスネで受け、両者はそこで仕切り直しに後方に跳んだ。

(トリガー、ヒート、サイクロン、ルナ……)

やべえな、マキシマムドライブ四回使っても、まだこんな状況か)

一見翔太郎優勢に見えるが、クリーンヒットを何度か当ててもなお勝利に近付いていない翔太郎にも、焦りはある。

マキシマムドライブは体に負荷のかからない便利な武器ではない。

エクストリームの補助がなければ二つ同時に使うだけで死にかけることもあるし、連

続で使えば負荷もゼロではないのだ。

ここからまた何度もマキシマムドライブを使えば、翔太郎の負担は更に大きくなるだろう。

「……セプテントリオンが、お前の殺害を条件にした理由が、分かってきた。仮面ライダー」

「あーはいそうかよ」

Wは^{ダブル}プリズムソードを盾に戻し、プリズムビッカーに四本のメモリを挿して、盾より多色のビームを放った。

《 CYCLONE! MAXIMUM DRIVE! 》

《 HEAT! MAXIMUM DRIVE! 》

《 LUNA! MAXIMUM DRIVE! 》

《 JOKER! MAXIMUM DRIVE! 》

ビームは一点集中されず、いくつものビームとなつてジョーカーの逃げ道を塞ぐ。

そしてビームは逃げ道を塞ぎつつ、一本にまとまるよう収束し、ジョーカーを襲った。

(イイは……)

《 METAL! MAXIMUM DRIVE! 》

(……耐えるしかない!)

「ライダープリヴェー——」

翔太郎がカッコつけて言おうとした技名を遮るように、サイクロンアクセルエクストリームの特大ビームが直撃する。

「——がッ!?!」

しかし寸前に体躯を鋼に変えていたジョーカーは、ダメージを最小限に抑えていた。

最小限に抑えられたダメージは、ジョーカーをゴロゴロと地面に転がし、翔太郎の精神力をもつてしても中々立ち上がれなくなるほどのダメージを与える。

「げほっ、げほっ、げほっ……いっつ、……いっあ、あれは……いっ」

だが、幸か不幸か。

盾ビームで吹っ飛ばされたジョーカーが転がった先は、翔太郎達をおびき寄せるために囚われていた、須藤雪絵が縛られていた場所だった。

「っ……待ってる、今助ける!」

翔太郎は雪絵を縛る猿轡を外し、体を縛るロープを外していく。

「しようた——」

「伏せろ!」

「!」

だが雪絵がそれに礼を言う間も与えず、アインはヒートトリガーエクストリームの姿

になり、銃とベルトのメモリで同時にマキシマムドライブを発動させる。

《 TRIGGER! MAXIMUM DRIVE! 》

《 XTREME! MAXIMUM DRIVE! 》

そして、超特大の火球を発射した。

「灰になれ、仮面ライダー……依頼人もろとも」

雪絵を抱えて回避する？ 不可能。

体を張って止める？ 不可能。

迎撃して叩き落とす？ 不可能。

翔太郎の頭の中にくつつもの対策が組み上げられては、片っ端から崩されていく。

そうして、ロクな対抗手段を思いつけないまま……翔太郎と雪絵に、その火球は着弾した。

黄色のオーマ・ドーパントが、玖珂光太郎に殴り飛ばされた。

それは悪を討つ正義の拳。

青い光を纏い、それを見た人間に”正義は必ず勝つ”という言葉を想起させるような、そんな圧倒的な拳であった。

「がはっ……!?!」

「な、なんだこいつ?!」

「データじゃここまで強いなんて、どこにも……!」

黄色のオーマ・ドーパントはその一撃で、メモリーブレイクされていた。

「正義は勝つ!」

悪は滅びる!

何故ならば、悪い奴だって迷惑かけた人にごめんなさいすりや、やり直せるからだ! 悪党が殴り飛ばされ、悪党が改心して良い奴になれば、いつか悪は滅びるからだ!

「無茶苦茶言ってるやがるぞこいつ!」

胸を張り真つ直ぐに立つ光太郎に、赤のオーマ・ドーパントと、黒のオーマ・ドーパントが、前後から挟み込むように襲いかかる。

光太郎は真正面の赤色に向けて跳び、赤色が迎撃に蹴りを放つたのを見てから、その赤色の蹴りをジャンプ台にして跳躍。

後方から迫り来る黒色に瞬時に接近し、拳を叩き込んでいた。

(技術なんてない……ないはずなのに……)

何故ここまで自然体で、何故ここまで圧倒的に強い……!?)

後退りする赤のドーパントにも光太郎は駆け寄って、右の拳を叩きつける。

ドーパントが展開したエネルギーのシールドが粉碎された。

光太郎が左の拳を振るう。

ガードに使われた赤色の両腕がカチ上げられた。

そしてラストに、もう一度右拳。ほんの一瞬に放った拳の三連打で、光太郎はドーパントを守りブレイクに追い込んでいた。

「つしゃ。んで、お前を倒せばステージクリア……だろ？」

壊した三つのメモリの内一つを踏み、ジャリツと音を鳴らす光太郎。

彼が相対するのはツヴァイこと、スカル・ドーパント。

『白にして白骨』の名を持っていても、心を持たぬ女である。

そんなスカル・ドーパントが、光太郎に手の平を向けた。

「天は愛す その心

白にして白骨の我は リユーン 精霊に命じる

完成せよ 『円風』

実戦的な短い詠唱から、白い光の衝撃波が無数に放たれる。

衝撃波は斬撃となり、ビルを輪切りにしてあまりある攻撃となって光太郎に飛んで行った。

迎撃するは、青い光が纏われた拳。

「邪魔だ！」

光太郎の拳は信じられない速度、かつ技量はなくともこれ以上なく最適な軌道で振るわれ、全ての異端をねじ伏せる青い光を纏わせていた。

ビル一つを切り刻めるだけの攻撃は全て叩き壊され、光太郎はツヴァイに手が届く距離、拳を叩き込める距離にまで接近する。

「天は戦う その夢を守り

白にして白骨の我は リユウ 精霊に命じる

完成せよ 『円翔』

「うおっ!?!」

しかしそこで、スカル・ドーパントは移動用の絶技を発動させた。

光太郎の拳の速度より速く、スカル・ドーパントは距離を取る。

そして三つ目の絶技の詠唱を行った。

「天は惜しむ その勇氣

白にして白骨の我は リユウ 精霊に命じる

完成せよ 『円盾』

盾を作る絶技を使い、ツヴァイは光太郎を囲むように領域を区切る。

「！」

光太郎が殴れば壊れるような壁であったが、それでも光太郎の足は止まり、光太郎の足を止めた時点で円盾は十分に役割を果たしていた。

円風、円翔、円盾が世界に刻んだ軌跡が、組み合わされる。

大規模絶技を発動させるための下地が、三つの絶技の組み合わせにより構築される。

三つの絶技の詠唱が、ひと繋がりの詠唱として扱われ昇華される。

そうして、三つの絶技を前準備と詠唱として発動する、超高度絶技が放たれた。

「我が名はツヴァイ 白の白骨

白にして白骨の我は リユーン 精霊に命じる

我が拳は逆転の一撃

完成せよ 『精霊機導弾』

円盾により区切られた空間の中に、特大の火力が集中される。

「！」

光太郎は飛んで跳ねて回りながら、青い拳を全力で振るう。

弾く。

弾く弾く。

弾く弾く弾く。

弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く弾く。

そしていずれ、光太郎の処理限界が来る——前に。

光太郎は全ての攻撃を、その拳で殴り壊していた。

「ハアーっ、ハアーっ、ハアーっ……ぜ、ぜえっ……ぜえっ……」

息を切らす光太郎の体に、新たに付けられた傷はない。

せいぜい、リターンズ・ドーパントに付けられた傷が開いたくらいか。

ツヴァイに心があれば、目の前の現実に関心折られていたかもしれない。

それほどまでに、人を守るといふ正義を掲げた玖珂光太郎は、圧倒的だった。

「……見たことある技で、助かったぜ」

光太郎は心なきツヴァイが次の行動に出る前に、拳の一撃でそのメモリを粉碎する。

「ちよつとだけ、寝てろ！」

倒れるツヴァイ。

碎けるメモリ。

そうして、罪を憎んで人を憎まぬ一撃が、ツヴァイを力から解放した。

「……待ってろ、ジョーカー」

光太郎は少しの休憩も入れず、翔太郎の下に向かって駆ける。

そうして、ロクな対抗手段を思いつけないまま……翔太郎と雪絵に、その火球は着弾した。

かに、見えた。

「なに……!?!」

ジョーカーと雪絵を包む青い光が、敵の攻撃を防ぐ盾となってくれていた。光太郎の拳の光ではない。

あれほど純粹ではなく、けれど翔太郎には、どこか懐かしく感じられる光。

《 NASCA! MAXIMUM DRIVE! 》

危機を前にして、翔太郎の手は自然とシユラウドから貫つたメモリに伸びていた。

まるで、メモリに導かれるように。

翔太郎はメモリがどういう効果を発揮するのも分からないままメモリを使い、マキ

シマムドライブを発動させたナスカメモリは翔太郎と雪絵を守り、砕けたメモリは地に落ちた。

「ナスカメモリ……霧彦……」

傷めつけられていた翔太郎の体に、力が湧いてくる。

情けない姿は見せられない、と。

あいつの妹さんを守るんだ、と。

仮面ライダージョーカーを、再び立たせる力が湧いて来る。

「この街を……泣かせる奴は……！」

翔太郎が手にしたメモリは、”おやつさん”と呼び慕っていた探偵の師匠、鳴海荘吉が愛用していたスカルメモリ。

シユラウドから受け取っていた、荘吉とシユラウドの絆の象徴とも言えるもの。

「……俺がつー！」

《SKULL! MAXIMUM DRIVE!》

スカルメモリの力で、ジョーカーの前に髑髏型のエネルギーが浮かび上がる。

「ライダーパンチー！」

ジョーカーはそれを殴り飛ばし、サイクロンアクセルエクストリームに痛烈に叩き込んだ。

「ぐっ……」

ジョーカーは、スカルメモリの崩壊と引き換えに、これまでのどの攻撃よりも大きなダメージを与えられたようだ。

サイクロンアクセルエクストリームが初めて、痛そうに体を抱えている。

アインは苛立たしげな声で、翔太郎を問い質し始めた。

「貴様、俺を舐めているのか？」

「何の話だ？」

「とぼけるな！ 体で受ければ分かる！」

貴様、この期に及んでメモリブレイクを狙っているな!? 俺を殺さないように！」

左翔太郎の拳に憎しみはない。殺意もない。

彼が望んでいるのはメモリブレイクであり、アインの捕縛であり、彼が罪を償うことだ。

戦えば戦うほど、アインには翔太郎のそういう部分が理解できてしまう。

理解すればするほどに、アインの”人への殺意”は、翔太郎に向きにくくなってしまう。

アインは殺す気で攻撃しているのに、翔太郎は殺す気を返してこないのだから、それも当然だ。

「罪は憎んでも人は憎まない。この風都の人々が仮面ライダーに望んでるのは、そういう心だ」

「人を、憎まない……う？」

「お前にこれ以上罪を重ねさせるかよ、アイン。」

「お前は自分の罪を数えて、数えた罪を一つづつ償うべきだ。……お前はそれで、許される」

何故、仮面ライダーのメモリブレイクは、人を殺さないのか。

それは、正義は悪を討つからだ。人ではなく、人を感わした悪のメモリだけを討つからだ。

メモリ
罪を憎んで人を憎まず。

道具が悪用されるのは使う人間が悪いのだ、なんてことを彼が言うわけがない。

仮面ライダーは人が重ねた悪を砕き、人がやり直す可能性を残すのだ。

その優しさが無ければ、人はきつと、仮面ライダーに相応しい者にはなれない。

「Nobody's Perfect。」

この言葉には『誰も完全じゃない』という意味がある。

だけど、この言葉にはもう一つ意味がある。

『誰にだって過ちはある』って意味がな。この言葉は……許しの言葉でもあるんだ」

玖珂光太郎は強く、鮮烈だ。

その在り方は周囲の人間にも伝搬し、周囲の人間を強くシンプルな正義の味方に鍛え上げる。

痛快で軽快で爽快で、彼の周りでは正義が悪を倒すという単純で心地のいい物語が紡がれる。

「左、翔太郎……」

「この街は俺の庭だ。そこで誰一人、泣いていて欲しかねえんだ」

けれども、左翔太郎はそれとは別ベクトルで、心地のいい物語を紡ぐ者だ。

彼は悪の事情を知り、同情し、気を使い、甘すぎるやり方で事件にぶつかっていく。足元を掬われることもあるだろう。

本物の悪人に騙されることもあるだろう。

バカを見ることもあるだろう。

それでも、それを知った上で、多くの者が左翔太郎ジョーカーに賭けるのだ。

その甘さでなければ、救えないものがあると知っているから。

「なあ、アイン。相棒を泣かせるなよ」

「何を……」

「記憶は俺達の中にある。

俺達の中の相棒の記憶は、俺達をずっと見てるんだ。

このジョーカーメモリの中に、切り札の記憶が内包されているのと同じように」
翔太郎はジョーカーメモリを手に取り、諭すようにアインに語りかけ続ける。

「大切な記憶は、俺達の中にずっとある。

相棒との思い出は、この心のなかにずっとある。

あの大切な日々は、この地球の記憶の中にある。

この地球がある限り！

俺があいつを思い続けている限り！俺とフィリップは永遠に相棒だ！」

仮面ライダージョーカーの右手の中には、握られたジョーカーメモリとサイクロンメモリ。
モリ。

それを並べてアインに見せて、翔太郎はありったけの言葉をぶつける。

「お前とツヴァイも、きつと永遠に相棒で在れるはずだ！お前が、間違えなければ！」

「——っ！」

『今のお前は間違っている』と暗に言いながら、翔太郎は二つのメモリをしまった。
逡巡し、僅かな迷いを見せるアイン。

「……」

悲しい事実が、ここにあった。

ありえない事実が、ここにあった。

普通の人間ならばありえない事実が、ここにあった。

アインは生まれて初めて、自分と同じ被験体だった人間以外の人間に、『好感』を抱いていた。

彼は今日この時初めて、被害者意識で繋がる仲間以外の人間を、好きになり始めていた。

逆説的に言えば、彼は今日まで同じ被験体以外の人間に、微塵も好意を抱けないような人生を送って来たということになる。

それは、悲劇の人生の証明でもあった。

アインは外からは見えない唇を噛み、懊悩する。

世界への憎しみが、世界の人間全てを裁くことは正しいのだと、彼の背中を押す。

だがアインの目の前に立つ、”相棒を失ってなお守るために戦う男”が、アインの歩みを進める足を絡め取る。

「正義は勝つ。そういう言葉がある。

勝った方が正義だ。それが当たり前で……この世界の真実だ。

俺はそう生きてきた。

あの研究所の奴らは強者で、あの頃の俺は弱者だった。だが、今の俺は弱者じゃない」
 憎しみのWダウルから、多様なメモリの色に染まった蒸気が噴き出す。

「あんたが正しいのなら！俺を倒してみせろ！俺が間違っていると、証明してみせろ！」

迷うアインは、これまでのように信念をもつて勝利を求めるのではなく、この戦いの勝敗に信念の行く末を託した。

勝てば、自分が正しいと確信できる。

負ければ、自分が間違っていたのかもしれないと思える。

そんな風に、この戦いの勝ち負けに自分の未来を賭けていた。

”正義は必ず勝つ”という言葉の名の下に。

《ELECTRIC!》

W用のメモリの補助を受け、雷を内包する暴風雨がジョーカーに放たれる。

広範囲を巻き込む、ジョーカーでも耐えられないであろう一撃。

「そうはさせるか！」

しかしそこで、間に割り込んだ光太郎が拳を叩き込み、嵐をかき消した。

相手が天変地異だろうと、神だろうと、世界そのものだろうと。

敵がぶつとばすべき悪であるならば、玖珂光太郎の拳は全てを砕く。

「玖珂光太郎!? なら、ツヴァイは……」

「あつちでお昼寝中」

「……っ!」

ここに来てアインは、ツヴァイへの心配からか、更に集中力を削がれてしまう。

対し翔太郎は光太郎が隣に立ったことで、同じように光太郎も隣に翔太郎が居ること
で、その心と体の力を更に強くしていた。

サイクロンアクセルエクストリームに、大きなダメージはまだ一発も叩き込まれては
いない。

ジョーカーは傷だらけで、光太郎は今にも倒れそうなくらいの出血状態だ。

一見、どこにも勝てる要素は無いように見えるだろう。

されど、彼らが勝てる要素は、彼らの心の中にこそある。

「忘れてたな、アイン。」

俺達はお前と同じ、相棒を失ってそれを忘れられない野郎どもだ。

誰も一人じゃ完全じゃない。だから俺達は、二人で力を合わせてお前に立ち向かっ
た」

「二人で二人の探偵。今夜の俺達は、ダブル青年探偵だ」

「完璧な人間なんて一人もいねえ。互いに支え合って生きていくのが人生ってゲーム

さ」

相棒を失つても、人生は続いていく。

相棒じゃないどこかの誰か、支え合う誰かは見つかつていく。

そういう”人生の真理”を、翔太郎と光太郎が並び立つ光景が、アインに教えているようだった。

「もう一度言うぞ、アイン」

左手を銃のようにした翔太郎、右手を銃のようにした光太郎が、それをアインへと向ける。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

傷と血にまみれながら、黒の男達はやせ我慢で格好付けた。

「俺達を苦しめた人間に罪を数えさせなかつたお前達が、今更っ！」

アイン。リターンズ・ドーパント。憎しみのW^{ダブル}。サイクロンアクセルエクストリーム。そのどれでもある者が、右手にエンジンブレード、左手にプリズムソードを持ち、二刀流にて襲いかかる。

翔太郎と光太郎は斬撃をかわし、二人同時に蹴りを放った。

剣の間を抜けてきた蹴りは、顔を狙ったジョーカーの回し蹴りと、足を狙った光太郎の水面蹴りの二つ。

アインは咄嗟に顔面を庇うが、その代わりに足を払われバランスを崩してしまふ。

二人の上下同時蹴撃が、綺麗に決まっていた。

「くっ！」

「ぶつとべー！」

「ぶつ飛べー！」

そしてバランスを崩したアインの腹に、翔太郎の左拳と光太郎の右拳が同時に叩き込まれた。

「か、はっ……！」

更に翔太郎の左足、光太郎の右足による同時キックが、間を置かずに腹に叩き込まれる。

「がっ!？」

光太郎がライダーであれば、ダブルライダーパンチからのダブルライダーキックと呼ばれるであろう、そういう連携。

強烈なコンビネーション攻撃を食らったアインはゴロゴロと転がり、やがてふらふらと立ち上がり、ビツカーシールドを飛行ユニット代わりに使って空に逃げていく。

「くうっ……俺は……俺は……！」

おそらくは空からの砲撃に切り替えるつもりなのだろう。

空から一方的に攻撃されれば、翔太郎と光太郎はかなり不利になる。

そんなことは、悪をぶつとばす青年探偵達も百も承知だった。

「ジョーカー！」

「ああ、分かっている。任せろ！ これで決まりだ！」

そこでジョーカーは、空に向かって高く跳躍。

《 JOKER！ MAXIMUM DRIVE！ 》

一瞬遅れて光太郎も跳躍し、天に向けて拳を突き出す。

光太郎が天に突き上げた拳を、マキシマムドライブを発動させたジョーカーの右足が踏み、その右足に纏われていた紫の光が、光太郎の拳の青い光を飲み込んだ。

そうして、光太郎に殴り飛ばされるように、ジョーカーは空の上へと跳んでいく。

（フィリップ……どこかで俺を見守ってくれているなら……俺に力を貸してくれ！）

ジョーカーメモリと、ジョーカーメモリに力を貸したエクストリームメモリが、最高の力をジョーカーの右足に集約させた。

集約された力は紫の光となるが、そこに玖珂光太郎の青い光が混ざったことで、紫の光はその色を劇的に変化させる。

今のジョーカーが身に着けているマフラーと同じ色の、風色緑色の光に。

（もう一度！）

左翔太郎の脳裏に光景として浮かぶ、男達の背中。

鳴海荘吉。

園咲霧彦。

フィリップ。

街を愛し、街を守り、そして消えていった男達の背中が、心に挫けぬ力をくれた。

翔太郎は、憎しみのWの胸ダブルにそうして、風色の光を纏わせた右足を叩き込む。

「ジョーカーエクストリーム！」

光は叩き込まれ、爆音を鳴らし、侵入して、炸裂する。

「……あつ、ガッ……」

アインはリターンズのメモリが壊されていく音を聞きながら、自分の敗北を悟る。

「仮面……ライダー……」

空の上に、爆発が起こる。

夜空に輝く爆炎の煌めき。

風都の住民はそれを見て、季節外れの花火だなど、そう思ったらしい。

勝敗は決した。

アインは倒れ、オーマ・ドーパントの変身者達は気絶したまま起き上がらず、ツヴァイだけが無表情にアインに寄り添っている。

翔太郎が携帯を覗くと、ちょうど街に現れたドーパント軍団を片付けたとの、照井のメールが入っていた。

「これからどうするんだ、アイン」

翔太郎は、倒れたまま起き上がらないアインに問いかける。

「さあな……自首か……贖罪にこの世界の守護か……復讐の継続か……」

アインは安易に正義の道には転ばないが、翔太郎の一撃と想いは確かに彼に届いており、もうアインは悪の道の上には居なかった。

『これを滅ぼしてしまつていいのか』という迷いが、アインの中に渦巻いている。

「なあ……ツヴァイ……」

アインは倒れたまま、全ての人間性を失っているツヴァイに話しかける。

返事など、期待していない。返事が返って来るわけもない。

そう思っていたはずなのに。

「アイ……ン……」

「——！ ツヴァ、イ……？」

ツヴァイは口を開き、アインの名を呼んだ。

この場の全員が揃って驚愕する。

人間の心を全て失っていたのなら、アインの名を自主的に呼ぶはずがない。

「ど、どういうことだ……？」

「時期的に、NEVERが財団の独自研究では未完成だったから、か……？」

半殺しにして半分生き返らせるNEVERだったから、とか……

ああくそ、俺は頭脳担当じゃねえってのに」

「仮にそうだったとしても、今日までこうならなかった理由が……」

アインはそう言つて、光太郎の握られた右拳に目をやった。

「そうか、精霊手……青く輝く拳！」

「え？ これで殴つたから？ 家電か何かかよ……」

「それ以外にありえない！」

まとめると、こうだ。

資金援助と引き換えに、死亡確定固体復環術NEVERを手に入れた財団X。

それを独自研究で発展させたもの、未完成で本物には程遠い。

完全に殺してから蘇らせる技術は、完全に殺しては使えない未完成の技術になつてしまつた。

そこでツヴァイへの人体実験に使用。

半殺しにして、そのままの状態を維持するような使い方をする。

そうして未完成の技術でNEVERにされてしまつたツヴァイは、人間性の全てを喪失。

そして先程光太郎の拳を喰らつたことで、ほんの僅かに人間性を取り戻したのだ。

彼の拳は悪を討つ正義の拳。

されど同時に、子を叱る親の拳にも近いものがある。

間違つたものを叩いて直す、物理的に触れられぬものを叩き直す拳。

彼の拳が纏う青き光は、悲劇やバッドエンドをひどく嫌うものなのだ。

「メモリ越しに一回殴つてあれなら、もう一回殴れば、普通の人間に戻る……かもしれないな」

「本当か!?!」

「別の世界で聞いたんだ。

ある土地では、生まれつきの不治の病をこの拳で治した奴が居ると。

ある土地では、悪化した戦傷をこの拳で治した奴が居ると。

この拳は運命の前借りをすることも、死を殺すこともできると。

青い拳は運命に反逆するために突き上げられ、その拳が正しいのならば必ず勝つ、と」
ぼうつ、と光太郎の右の拳から青い光が漏れ始める。

それは夜が暗ければ暗いほど、闇が深ければ深いほど、燦然と輝く一条の光。
絶望と悲しみの海から生まれ出る、銀の剣の輝きにも負けぬもの。

どこかの誰かの未来の為に、地に希望を、天に夢を取り戻す光。

「全ては、想い一つ」

『悪をぶつとばす青年探偵』に、これ以上なく相応しいものだった。

「助けたいか？」

「助けたいッ！」

「……いい返事だ。しかも早い」

食い気味に返答して来たアインを見て、光太郎は少し楽しそうに笑う。

ニカツと笑うその笑顔は、彼の在り方と相まって、まるで太陽のようだった。

「なら……やったことはないけど、やってみるか！」

光太郎はアインの想いの代弁者として、その想いを青い光に変えて、その拳に纏わせる。
る。

翔太郎は光太郎が心配するだなんて思っていなかったが、ふと気になったことがあ

り、それを光太郎に問うてみる。

「誰に教わったんだ？ その理屈は」

「ペンギンだ」

「は？」

玖珂光太郎に”その青き拳の使い方”を、ほんの少しだが教えた師匠。

それは、ペンギンだ。

左翔太郎よりも、ずっと——ハードボイルドな、ペンギンだった。

「ハードボイルドペンギン、ってやつさ。ハードボイルド探偵」

戦いの終わりを告げる青き光。

眩^{まばゆ}い光が、既に失われたハッピーエンドを、取り戻してくれていた。

どうにも奇妙な事件だった。

この報告書の書き出しは、これしかありえないと思う。

あと、報告書は今後も俺なりの英語で書かせてもらう。絶対に、絶対にだ。誰が何と言おうが、俺は俺なりの英語でこいつを書いていくことを、ここに宣言する。

こいつは俺なりの宣誓書ってやつだ。

照井の野郎は、あれだけの数を片付けてピンピンしてやがった。

不死身つつたつて限度があるだろ……

昔全身に火傷負つても怪我の跡も残らなかつたし、あいつの体はどうなつてんだ？

アイン達は、いつの間にか消えていた。

ここではないどこかに自首したのか。

戦いのない場所に行つて、平穩に暮らす道を選んだのか。

やるべきことをやってから、自首するつもりなのか。

あるいは、この世界の外側で戦っているのか。

俺にはあいつらが今どうしているかは分からない。

だが、これだけは言える。

あいつはきつと、これからは自分の罪を数えて、それを償うために生きていけるはず

だ。

最後に「これからは復讐のためじゃなく、恩返しのためにこの力を使いたい」とも言うてたあいつなら、きつと……

雪絵さんは、記憶を取り戻した。

これで俺が受けた依頼は完遂、と考えてよさそうだな。

美人の依頼を完遂できないなんざ、ハードボイルドには程遠いつてもんだぜ……

霧彦の話を少し聞かせてもらった後、「また来ます」と言われて別れた、のはいいんだが。

あれからも本当にちよくちよく来るんだよな。これからもちよくちよく来そうだな。

……なんとなく、長い付き合いになりそうだな。

そして、玖珂光太郎。

……こういうのはこつ恥ずかしいが、あいつが来てくれたおかげで、俺は少しだけマシになった気がする。

少なくとも、やせ我慢してる俺に照井が文句を言うことはなくなった。

あいつは「この世界に来た意味が分かった」と言って、ツヴァイを助けるだけ助けて、すぐさま別の世界へと旅立ちしまった。

一度も、振り向かず。

あの躊躇いのなさと、全力で走り去って行くあの背中、男として少し憧れちゃうな。俺とあいつは共通点が多かった。俺とジョーカーメモリのように、どこか引き合っていたような気がするくらいだ。また会えたらなと、素直に思える。

迷った時は、あいつの言葉を借りれば、また戦えるような気がする。

「俺は、悪をぶつとばす青年探偵だ」ってな。

見てるか、フィリップ。

俺はこれからも、お前が愛した街を守っていくぜ……

タイプライター＋ローマ字打ちで、格好付けながら報告書を書いている翔太郎。

彼はこうして事件の終わりを格好良くメタがるが、大抵の場合そういう目論見は叶わない。

彼には彼の、ハーフボイルドらしい終わり方がある。

それをしよっちゆうもたらす要因Aが、彼の前に現れた。

「ん？ おー亜樹子、遅い出勤じゃ……」

「あたし聞いてない！」

「は？」

事件に一切関われず除け者にされていたことに至極ご立腹な、鳴海探偵事務所の所長が現れた。

「出番ない、活躍ない、あたし聞いてないいいいいっ!!」

「痛えから叩くんじゃねえ亜樹子おおおおっ!!」

昨日は昨日の風が吹く。今日は今日の風が吹く。明日には明日の風が吹く。

風都には、いつだっていい風が吹いている。

明日も、明後日も、遠い未来も、ずっとずっと。

左翔太郎は、いい風が吹くこの街を、一人で踏ん張りながらも、守っていく。